
逆襲の元勇者（仮）

怠け者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆襲の元勇者（仮）

【Nコード】

N3966W

【作者名】

怠け者

【あらすじ】

勇者として召喚、魔王を倒したが主人公を召喚したヒロインに殺された。日本に転生。記憶を思い出して、ある決意をする。自作のプログラムで魔術の研究をしていたが、しかし、米国にハッキングされていた…。再び異世界へ。初投稿9月3日

処女作になります 序盤は戦闘は少なめになる予定

ある伝説の勇者の最後

俺は死んだ。殺された。愛していた彼女に…

死ぬ直前に今までの人生が走馬灯のように思い出す。

日本で生まれ、サラリーマンの父とパート勤務の母に育てられ。

兄と弟に恵まれ。夢を抱き。がんばって一流大学入り。

国家公務員試験を合格し官僚になる事が決まっていた。家族みんな喜んでくれ、

ここまでがんばったのは。すべては、子供の頃からの夢の為…

しかし… 突然その時がやって来た。

家族も、友も、恋人も、夢も、人生も、奪われ捻じ曲げられた。

異世界に召喚されたのだ。

そこには、天使のように笑顔で微笑む美少女が居た。

彼女が俺を召喚したのだ。魔王を倒す、勇者として…

魔王を倒すしか元の世界に帰る方法がないと彼女に言われ、

最初は仕方なく魔王を倒しに彼女や仲間たちと旅に出た。

旅をしているうちに、彼女を愛してしまった。

魔王を倒して、彼女とこの世界で生きて行く事を決めた。

地獄のような戦いが何年も続き、だが彼女の為なら辛くはなかった。

旅の途中で知り合った、戦友や苦しんでいる人達の為にも戦った。

そして、命を賭けやっとの思いで魔王を倒した。

これで彼女と平穏に暮らせる　そう思っていた…

魔王との死闘で立っているのがやっとなった俺の背中に、

愛しい彼女は毒が塗られた剣を突き立てた。振り返ると…

彼女と仲間だった者達の愚か者を笑うような冷たい笑顔があった。

旅の途中、戦友や助けた人達の話で。

こうなる事は、うすうす分かっていた。

だが信じたくなかった。愛しい彼女が裏切るなんて…

いや、最初からそのつもりで召喚したのかもしれない。

愛している者に裏切られ、死に逝く俺に確かめる事は出来ないが…

そして、俺は全てを失った…

前世の記憶（前書き）

文章を見直し、修正しています。

前世の記憶

俺は新田^{にった} 義雄^{よしお} 16歳。誰が見ても普通の高校生だ！

普通だと思う… たぶん… え？何？その人を疑うような目は？疑てる？

まあ俺には秘密があるけどさ、人間多かれ少なかれ秘密の一つや二つ有るでしょ？

そう、あれは小学校に入学して間もない頃。

幼馴染の村上^{はじめ} 一と秋葉^{ゆづ} 優のいつもの3人で遊びに出かけた時だった。

その日もいつものように公園で遊び夕方になるころ真っ黒な分厚い雲が

空を埋め尽くし、突然雨が降り始め雷鳴が聞こえ豪雨になり。

俺たちは、公園の象の形をしたコンクリート製の滑り台の下で雨宿りする事にした。

そんな時に事件は起きた、突然のフラッシュと轟音、震度3ぐらいの揺れ共に

俺たちは意識を失った 目を覚ました時病院のベッドの上だった。

落雷は、近くの金属製の遊具に落ち雨水で間接的に感電して気を失ったらしい。

幸いにも軽い火傷だけで、他の二人はその日のうちに意識が回復し退院

たが、俺は3日間寝ていたみたいだ。そして俺が目覚めた時、

“前世”の記憶が有ったのだ……思い出してしまった……

あの辛く、忌まわしい記憶を…

今から思えば、かなり心配させたと思う。

やっと目覚めたかと思ったら突然大声で叫び、泣き、しばらくして再び意識を失った…

目が覚めてから1ヶ月ぐらいは、何も食べず栄養剤を点滴して命をつないでいた。

生きる気力を失っていかけていた。

俺の家族はかなり心配して、特に母は泊り込みで看病してくれた。父や爺ちゃん婆ちゃん兄ちゃんも交代で、毎日病院に来てくれた。

その時は、誰も何も信じられなかった。

今の家族ですら…

何故？ どうして？ 転生してまでこんな思いをしなければならなののか

神は“何故”こんな試練を与えるのか？ “何故”魔王を生み出したか？

“何故”

神など居ないのか？

“何故”彼女は俺を殺したのか… 知りたい…

そして二度と俺と同じ思いをするような人を生み出たくない。

知りたい事が出来た。やりたい事が出来た。そして奪われた、夢を取り戻す。

彼は生きる事にした。

今は新田義雄としてこの平和な日本で毎日楽しく普通に生活している。

俺が普通じゃないのは、妖精や幽霊が見えたり、話せたり、

“前世”の頃使っていた魔法が使えた。

中学の頃から親父の仕事を手伝っていた影響で家を建てられたりする。

何かさらつと普通の高校生らしくないことを言っただかもしれないが今はスルーでお願い。ん？すっかり聞いた？別にばらしてもいいけど

誰も信じないだろうね、下手したら病院に連れて行かれるよ？

……ゴホン。まあ俺は少しでも親が楽になればと手伝い始めたら自然と仕事を覚えていっただけだ。

ちなみに親父は、小さな建設会社の社長で、母親は自宅のマンション一階にあるレストランのオーナーシェフだ。でも最近は手伝いをしていない。

親父の会社は、兄が継ぐ為に入社して修行中なので 手が足りて居る。そんな訳で手伝いに行っていないからだ。

母の店の手伝いも有るのだが今は改装中。

学校も明日から夏休みに入る… 宿題？もう終わったよ、
だって前世の記憶のおかげで楽勝（笑）あれ、死ねとか思った？

「さて、魔術の実験でもやるか」

普通の高校生とは思えない言葉をつぶやくと、PCパソコンの電源を入れる。

俺は“前世”の力と記憶を得てから暇があると魔術の実験をしている。

魔法や魔術を使える事じたい他の人に話した事がない。

言ったり発表したりしても、誰も信じないだろう下手したら病院送りだ。

研究と言っても実際に魔法を発動するのは最終段階で、ほとんどはPCで研究している。

俺はある一定の魔術の法則を前世で発見していたので、

魔法を発動しなくても新しい組み合わせでどんな結果になるか、

予想できるソフトを自分で作り。

最終的に誰にも見られない所で発動させて、微調整と最終確認をしていた。

前世で行った世界は、地球の中世以下の科学レベルしかなくPCを使って

魔術を研究している人間は、俺ぐらいだろう。

「やっぱパソコンは凄いな。前世の数万倍の研究スピードだ」

簡単に魔法や魔術の説明をする。

魔法は、自分の魔力をダイレクトに使って発動させる魔法で、
必要なのは、魔力をコントロールする事とイメージ力だ。

魔術は、詠唱、魔法陣、道具などを使い、発動させる魔法だ。

勿論魔力をコントロールする事は必要で、詠唱をする事でイメージ力をカバーできる。

魔法陣を使う事で、自然界の魔力を使える。

魔道具は、魔法陣や魔法文字を魔力の高い物質に刻む事でさまざまな効果がある。

実は、異世界に行く魔術はもう出来ている。

だがそれだけでは足りないのだ、俺がやろうとする事には。

契約書

研究を続けて夏休み初日の昼ごろ。

ピンポーン♪ ピンポーン♪

そうか今日は俺だけか… 義雄はしぶしぶ玄関に行きドアを開ける。

「お忙しいところ失礼します。警察庁の森田と申します」

ビジネススーツを着た、警察庁の森田さんが警察手帳を俺にハッキリ見せる。

どうやら森田さんは警視正のようだ、まだ30代半ばぐらいなのに官僚かな？

森田さんの後ろに金髪蒼い瞳のメガネを掛け、髪型はポニーテールで黒っぽいスーツを着た、おそらく20代半ばの超美人でグラマーな女性が俺を見ている。

「警察の方がどんな御用でしょうか？」

「その前に失礼ですが、新田義雄さんですか？」

森田警視正が質問を質問で返してきた… ちょっとむかつくが答える。

「はい、そうですか…」

「すいませんが話を聞きたいのですがお邪魔してもよろしいでしょうか？」

（ホントに邪魔だよ… 美人も居るしまぁいいか）
「…はい、どうぞ」

「失礼します」

森田警視正と金髪の美女が家に上がってもらいリビングに案内して、お茶とお茶菓子を出す。

お茶を二人に進め、同じ質問をする。

「警察の方が僕にどんな御用でしょうか？」

「実は警察ではなく、此方の米国政府のリーザ・スミスさんが新田君に聞きたいことがあるそうです」

森田警視正がリーザ・スミスと目線を合わせる。

『はじめまして、新田さん米国の中央情報局のリーザ・スミスと申します』

森田警視正は、リーザ・スミスが話した言葉が理解できなかった。

「リーザ・スミスさん？」

森田警視正は、案内役兼通訳の為に同行するように上司から命令されていたが、リーザ・スミスの発した言語は、英語でも日本語でもなかった。

（俺と同じ転生者か？それとも向こうの世界の人間か？…）

正直面倒な事ごめんだったが、彼の夢の為に、

何故異世界の言語を知っているのか興味の方が強かった。

『はじめましてスミスさん… 僕も話を聞きたいですが、まずスミスさんのお話を伺いましょう…』

義雄は、驚きながらも彼女の言葉に答え。“前世”に覚えた異世界の言語で。

呆気に囚われている森田警視正を無視して話が進んでいく。

『この言葉が分かるだけで十分なのですが…ご説明しましょうまず貴方には謝ります。実は……』

彼女の話をもとめるところだ。

日本政府とのテロ組織の共同捜査過程でテロ組織のPCにハッキングする事になり。複数のIPアドレスまで絞れたが特定できず。残り全てのPCにハッキングしたらしい。

目的のテロ組織のハッキングは成功し逮捕できたが、その過程で俺のPCにもハッキングして偶然、魔術のソフトやデータを彼女が発見し。

解析した結果2割の魔術が解析できた。

このソフトとデータが本物で有る事が証明され、彼女が今俺の前に居る。

……とんだとばっちりだ、プライベートも何も無いな。違法じゃね？

今米国のとある研究施設で異世界の研究をしているらしい。詳しいことは機密で話せないそうだ。

『それで新田さんはなぜ魔法やこの言葉をご存知なのですか？』

（ふむ…本当の事を話すか信じるかどうかは、この人しだいだ 機密扱いらしいし公表はしないだろう）

『…信じるかどうかはスミスさんしだいですが僕には前世の記憶があります…魔法もその頃覚ええました』

彼女は少し間を空けて話し出す。

『……正直半信半疑ですが新田さんは、実際に魔法を使えますか？』

（まあ はいそうですね、信じる人は居ないだろうな）

『ええ、少しなら… 地球は魔力が薄いので、魔法が使いにくいで

すが、たいした魔法は使えません…お望みならここで御見せしますよ…』

さつきから此方の様子を見ている、森田警視正に視線を向ける。

『いえ…ここでは不味いですね…新田さんこれを米国政府からの正式な契約書です』

英文で書かれた、書類の束をテーブルに置く。

「これは…」

森田警視正が啞然とした表情で、書類を見ながらつぶやく。

その書類を見ると、本文の下に直筆の大統領のサインが書かれていた。

俺は書類を取り読み終わると。

『…僕はまだ高校生ですし学校と両親に許可が必要です』

『両親と学校の許可は私どもで取ります』

『…分かりました、ですが両親や学校の許可が前提です。僕はどちらも説得するつもりは有りませんそれでよろしいですか？』

ちなみに俺の学校はバイト禁止だ。親の手伝いはしているけどね。バイト代はもらっていない。そもそも小学生の頃から手伝っているからその分小遣いを多めにもらっている。

『はい、それで結構です。時期はご両親と学校の許可が出次第でよろしいでしょうか？』

『ええ、ですが前日までに連絡を下さい』

『分かりました、ご両親は今このマンションの一階でお店の改装中

ですね？』

どうやら今日話していく気らしい、それにしても俺のことを調べてきたみたいだな。

『はい、今母の店を父が改装しています。おそらく母も居ると思います』

結局…… 親父は美人に弱く、母はお金に弱く、相手が米国政府なので大丈夫だろうと言う判断らしい。

建前は、俺の開発したソフトの情報提供だ。

もし米国政府で採用されれば、多額の著作権料を支払うとか。その見込みが高いとか。何とか言ったらしい。

OK金くれ、てか、無断使用料よこせ…

学校の方は、政治的な圧力で直ぐに許可が出た。暫定的かつ特別にと言う事だ。

他の学生や保護者には、言わないように校長から電話で釘を刺されたが、その日の内に許可が出てあっけなく行く事になった。

スミスさんは、両親の説得が終わるとまた僕のところに来て、明日10時に迎えに来ることを告げて帰っていった。

ちなみにスミスさんは、日本語が普通に話せたので森田警視正は、ただ呆然としていたみたいだ…

“ 砂漠の真ん中の研究所 ”

俺は、今倉庫の中に居る。魔法を見せて欲しいそうだ。

観客は軍服を着た偉いさん2人、スミスさんとスーツを着た偉いさん1人、護衛らしいマツチヨの兵士5人、その中1人はカメラを俺に向けている。

固定カメラもいくつか有が何でも中継しているらしい。

俺は、自作の杖（魔道具）をもって倉庫の真ん中で待機している。スミスさんは時計を見ながら 「…では新田さん、お願いします」

「分かりました。では、はじめます」

俺は、詠唱をあえて唱える（この程度ならホントは詠唱も杖も要らない）

するとサッカーボールサイズの火の玉が1つ俺の前に現れる。

そして、的の戦車に向けて火の玉が飛んで行き、戦車の装甲にぶつかり火柱が上がると直ぐに火が消える。

「これが簡単でポピュラーな詠唱を使った魔術です 火炎瓶程度の威力しかありませんが…」

偉いさんたちは胡散臭そうにしている人がほとんどだ。そりゃそうか、ミスター。リックなら同じことが出来るだろう、魔力を使わない魔術で。

「では魔法陣を使い、錬金術と言われる魔術をお見せします」

倉庫のコンクリート製の床にチョークを使い10分ぐらいで魔法陣を書き。

杖を持って詠唱を唱えると魔法陣が青白く輝き。魔法陣からコンクリート製のゴーレムが現れると。

戦車に向かって歩き出し手で戦車に何度もパンチをする。

ゴーレムの右腕が粉々になると、そのまま左手も粉々になる。

続けて数回キック、今度は左足が粉々になり。

ゴーレムが倒れてゴーレムの体、全体が粉々になる。

流石に戦車はボコボコに凹んでいる。

「これが魔法陣を使った錬金術と言われる魔術です。

錬金術は、戦闘には向いていないのであまり使いません」

流石にゴーレムを見た偉いさんたちは呆然としている。

これは、ミスター。リックでも無理だし驚くのは当たり前だな…

その後いくつか魔術を使い、デモンストレーションを終える。

偉いさんたちは、しばらく呆然としていたがいくつか質問を受け初日を終える。

二日目、

朝から昼間で俺は、軍の病院で精密検査をして。

午後から兵士やスミスさん科学者らしき人数人に魔法を教える。

この日に教えた事は、当たり前だが魔力を消費して魔法を使う事から魔力が例外なく誰にでも多かれ少なかれ有る事。

魔力は人に限らず物質ならなんにでも魔力があり。

多かれ少なかれ誰でも魔術が使えること、

魔法を使うのに必要な事は、発動する魔法を明確にイメージする事、魔力の使う事、最低この二つが必要だ。

詠唱、魔法陣、魔道具は、魔力のコントロールや不足分の魔力を物

質から補ったり、イメージを補ったりする補助的な役割である事などを教え。

実際に自分の魔力を感じてもらう為に、全員の体に魔力を流して感じてもらった。

後は本人達が魔力を感じてコントロールできないと、魔法は使えないので自習するしかない。

簡単に覚えられたらとくに地球は魔法であふれている。

特に地球の物質や地球自体になぜか魔力が薄いので難度は高い。

三日目、

午前中は、昨日の続きで魔法を教えているが魔力を感じる事すら難しいようだ。

地球の人間の魔力は異世界の人間と変わらないが魔力を流したり使ったりするとなぜか、魔力の消費が数十倍かかる。

そんな訳で、午前中はなんの進展も無かった。

午後、米国本国からホフマン大佐という魔法を教えていた米兵の上司と、スターク博士と対面している。

ホフマン大佐は筋肉質で身長は180cmぐらいで軍服を着ている。スターク博士は中肉中背で、身長はホフマン大佐と同じぐらいでスーツを着ている。

魔法や前世の事をいろいろ質問され話し終わると数枚の写真を見せられた。

「これが何かわかるかね？」

「…ええ、これはゴブリンですね、これはホブゴブリン。これはオークこれは…写真ボケで見難いですが リザードマンですね」

俺は、地球では有り得ない写真を見ながら動揺しつつも答える。

ホフマン大佐は、俺の目を見ながらしゃべり出す。

「…君はこの化け物と戦って勝てるかね？」

「ゴブリンやホブゴブリン相手なら何匹居ても勝てますね。リザードマンは数が多いと苦戦します。準備さえ出来ていれば何とかなると思いますよ」

ホフマン大佐は「そうか…」と言って何か考えているようだ。

「新田君、私達に力を貸してくれないだろうか…」

この後、大佐の探索部隊と共に再び異世界に行く事になる。

――――

3カ月後、

俺は異世界探索部隊に参加する事になり、準備に追われている。

スターク博士から聞いた話だが一年前にある実験中に実験の失敗と共に偶然時空の歪みが発生。

そこから人間が、異世界から地球に来てしまったのだ。

彼の名はミゲル・エランド（18歳）。

彼の話だと、ギルドの仕事で薬草を採りに山に入り探索中に巻き込まれて、こっちの世界に来てしまったそうだった。

前世の俺の境遇に似ていて、他人事ではなかった。

まあ俺の場合無理やり召喚されたんだが…

ミゲルの家は商家で、彼は次男。跡継ぎには長男になるので、ミゲルは魔法も使えるし、昔から憧れていた冒険者になる事にしたそう

だ。

それではじめての仕事中に巻き込まれた。なんと言うか、かわいそうに…

ミゲルから言語や魔法といった異世界の事を学び、そして異世界への探索が行われる事になった。

ホフマン大佐の話では歪みが出来てから3回、探索部隊を送っているそうだが

1回目は、行って帰ってくるのが目的で、滞在1時間で戻ってきて成功。

この際に現地の土、植物、昆虫などを採取。

2回目は、生物を持ち帰るのが目的で搜索、滞在3日予定だったが2日目にゴブリンの夜襲を受けて、

何とか撃退したが部隊が混乱し死傷者を数名出す。

その時にゴブリンの写真とゴブリンの遺体を回収し撤退。

3回目は、完全武装で大規模な部隊で編成目的は出口を中心に1キロ圏内のモンスターを撃滅して、安全確保と駐屯基地の設営。

だが、部隊がリザードマンなどに敗退…殲滅され。基地は何とか建設出来たが、再びリザードマンから攻撃を受け退けたが死傷者が多く、ホフマン大佐は撤退を決断。

3回目の探索が行われた頃に俺の事が分かったそうだが、多くの死傷者が出たのに4回目の探索が決定されたのには、訳がある。

採取した植物の研究がかなりの成果が出たらしい、どんな成果かは機密なので詳しくは、教えてもらえなかったが…

すでに採取した植物を地球で栽培を始めたそうだが、その為に追加で

植物の採取と周辺の土の採取。他の植物の採取がどうしても必要で、4回目の搜索が決定されたそうだ。

それと同時に別部隊がミゲル帰還に便乗して異世界の町に行く事になり俺も同行する事になった。

それで明日出発の為に装備品を確認している。

迷彩服上下 拳銃（ベレッタM92） ヘルメット ナイフ 携

帯コンロ 腕時計

大型バックパック（リュック） 携帯食 水筒 デジカメ 無線機

防水&ソーラー充電可のノートPC LEDライト 寝袋 筆記用

具 ノート

USBメモリ×3 日本刀（魔法陣入り）魔道具の杖（自家製）
ロブ

ポーチ（私物入り）

ミゲルと話して分かった事だが、勇者は魔王を倒し共に死んだ事になっていた。その後、魔王を倒した姫とその仲間だった聖騎士が、結婚して国王になり。

英雄王と呼ばれているらしい…

魔王が死んで2年ぐらいは、平和な時代があったそうだが今度は魔王が支配から解放された国々や貴族の間で覇権争いの末、大陸中に戦争が発生し。

魔王が死んで16年たった今でも戦争が続いている。

装備品の確認が終わった頃、ドアをノックする音が聞こえる。

「どうぞ、開いています」

すると「失礼します」と言いスミスさんが部屋に入ってくる

「“例の契約書”にサインをいただいて来ました」

「ああ、ありがとうございます」

「本当に良いのですか?…」

「はい、前にも言いましたがこれは僕の夢の為でもあるんです。しかも米国がバックに付けてくれるのですから、感謝している位です」

そう俺は、この作戦で異世界に潜入し米国の支援を受け、民間会社として異世界で活動する。世界間での貿易が会社の業務になる。何度も話会って米国政府と合意した契約書の控えを確認する…俺のサインと大統領のサインが入っている。

「確かに受け取りました」

「頼まれた物資は準備できましたので、予定通り明日持っていきます」

「了解です」

「では私はこれで失礼します」

「ご苦勞様です」

スミスさんを見送り、明日の為に早めに寝た。

時空の歪み（前書き）

文章の訂正をしています。

時空の歪み

翌日

まさかこんな形でこんなに早くにあの世界に行く事になるとは…
最初は夏休みのバイト感覚で引き受けたが結局異世界にいく事になるなんて、学校にはアメリカに留学した事になっている。
親には、アメリカの学校に通いながらソフトの開発をするって事で話が付いた。

俺の目の前には、小さいブラックホールのような黒い渦がある。
「これが”時空の歪み”か…」

義雄はそう言うとき空の歪みに入る。
そこは、真っ黒な空間で少し先に光が見える。
光に向かって行くと、時空の歪みを抜けそこには車が4〜5台入り
そんな倉庫のような建物の中だった。

ホフマン大佐が、周囲の安全確認と物資の運び込みを隊員達に指示している。

『大佐 基地内には異常はありません 現在地雷とトラップを確認中です』

「分かった、慎重確認しろ」
『了解』

無線で外の部隊と連絡を取っている。

「大佐、物資の運び込みは終わりました」
「分かった、モンスターの生け捕り用罠の設置に取り掛かれ」

ホフマン大佐が兵士に言い終えると俺の方を見て

「新田君、例の魔法陣の準備を頼む」

「僕は何時でも大丈夫ですよ」

「そうか、では頼む」

「分かりました」

前もって準備して置いた、魔法陣が刻まれた、ステンレスの板に乗り、魔法陣の中心にある穴に魔道具の杖を刺す。

そして、詠唱を唱えると魔法陣が輝きだす。

「これで周囲100メートルに人とモンスターは入れません、勿論我々以外ですが、

でも高い魔力を持つモンスターや人間だと突破される可能性はあります。まあ、ドラゴンや高位の魔術師が来ない限りは気づかれないと思いますがね。万が一魔法陣が破られたら魔法陣の光が消えます。杖を抜くと結界が解除されます」

「ああ、分かった。こっちの魔法陣は転送用のだな？」

「はい大佐、まだ転送先の魔法陣が出来ていないので使えませんが

：

僕もそろそろ出発してよろしいでしょうか？」

「勿論だ、気をつけて行け」

「はい、では行ってきます」

向こうの世界から持ち込んだ幌の馬車（二頭引き）に乗り込む。

別部隊と言っても、ミゲル、スミスさん、ロイ・バーク少佐、ポール・ブラウン中尉、それと俺だけだ。

町に未知の軍隊が大勢行ったら目立つし、戦争になりかねない。彼らが選ばれたのは、神虎大陸の公用語が話せるからだ。

今から行く町は、山を降りて50キロぐらいの所にある。

パティン王国首都ボーダー、パティン王国は、神虎大陸最東の国で、神竜大陸との交易で栄えている。神虎大陸では、中堅規模の国で回りに大国もない事から、比較的戦乱の中でも平穏な方なのだが、高齢な国王が跡継ぎを決めていない事もあり貴族の間で政争が絶えないそう。

俺が召喚されたのは、神虎大陸中部の大国、神聖デント王国現在隣国と戦争中（聖戦）らしい。

ミゲルの家は、ボーダーの町にある。

ミゲルの実家エランド家は、代々商家で主に大陸間交易と葡萄酒ぶどうしゅを生産販売しているそう。俺達はミゲルの家に向かう予定だ、ボーダーの町で商売をする為にもミゲルの親父に相談しよう思っている。

「嬉しそうだな、ミゲル」

俺は、御者席に座り道案内をするミゲルに話しかける。

「ああ、勿論だ。久しぶりの故郷だからな、心配するだろうし早く帰りたいよ」

ミゲル・エランドは18歳、身長は185cmぐらいで筋肉質、子供の頃から親父の仕事で葡萄酒の樽を運んだりして、こき使われて鍛えられた（本人談）髪は茶色で目の色は黒。顔はまあギリ、イケメン？研究所で知り合って仲良くなった、今回の作戦を企画したのもミゲルを帰還させる為でも有る。

ミゲルは、地球で人体実験でもされて帰れないかもしれないと思っ
ていたらしい。

今回の作戦が無ければ、そうなってもおかしくなかったかも…

そんな訳で、俺を恩義に感じているみたいだ。

だが、俺の前世が勇者だった事はミゲルや他の人にも教えていない。

やっと山を降りてきた頃には、日が落ちる頃で野宿する事にした。

バーク少佐とブラウン中尉が手際よくテントを組み立てて居る。

ミゲルは、焚き火の準備をしていて。スミスさんは、ホフマン大佐に無線で報告をしている。

俺はモンスター除けの魔法陣を書いている。

ホントは書かなくても出来るが…

なに？サボるんじゃない？前世の頃の教訓で自分の力はなるべく隠す事になっているんだよ…

それに今の俺は勇者でもなんでもないから、チートの力は与えられていないただの普通の人間だ。

なにその人を疑う目は？ 所で俺は誰に言い訳しているんだ？

野宿の準備を終え、みんなで米軍の携帯食を食べている。

「ヨシオ、俺ホントに帰れるんだな… ありがとう。それでいろいろ考えたんだが。ヨシオ良ければ、仕事を手伝いたいんだ」
不意にミゲルが俺に真剣な表情で話し出す。

「俺親父の仕事見てきたし役に立てると思うんだ…」

「ありがとうミゲル、ホントは僕からお願いしたいくらいだよ」

スミスさん達は黙って俺たちの事を見ていた。

食事も終わり、交代で見張りを立て夜が開ける

ミゲルの家（前書き）

文章の訂正をしています。

ミゲルの家

モンスターや盗賊に襲われている、お姫様や奴隷商人に捕まった美少女に会う事無く。

無事にボーダーの城下町にたどり着いた。

町は海以外壁に囲まれており門には兵士が立っている。

特に呼び止められる事無く門を通過する。

服装から馬車など、念入りに考えて来たおかげかな。それにここは交易都市いろんな人が絶え間なく出入りしている。

そんな人々をチェックしていたら物量が停滞する。流石に賞金首や怪しい人間は呼び止められるが、馬車などに隠れていたら分からないだろうな。

そんな中、デジカメを握り締めブラウン中尉が写真を撮りまくっている馬車の中から撮っているのを目立ちほしないが：

仕事なのは分かるが。ブラウン中尉は、日本のアニメをこよなく愛するアニオタで。

虎人の亜人を見ると『ネコミミ』と日本語で言い興奮していた。

彼は魔術の訓練も一番熱心で今回の任務も志願して来ている。

これでも米軍のエリート士官なのだが：

多分あの撮り方は半分趣味だな。いや、全部？

見かねたバーク少佐が何かブラウン中尉に言っている。スミスさんは町を観察して何かメモをしている。

街中は交易都市らしく、多種多様な民族。

エルフ、ドワーフ、虎人などの亜人を見受けられる。

勿論義雄のような、アジア系の人間も数多く居る。

神竜大陸の住民は大半が見た目はアジア系の人間だ。

この大陸でも黒髪黒い瞳は少ないが珍しくは無い。露天の客引きの声が聞こえてくる。そんな活気のある露天街を抜けてミゲルの家に向う。

ミゲルの家は港の近くにあった。潮の香りと微かに波の音が聞こえる。ミゲルの自宅は2階建ての屋敷で、そばには倉庫が並んでいる。

すると倉庫から茶髪で中肉中背の男が出てきた。

「ミゲルじゃねえか…」

「父さん、ただいま」

「心配かけやがって」

そう言つとミゲルを抱きしめる。

「ミゲルこちらの方は？」

ミゲルの父はミゲルを放し俺達の方を見てそう言った。

「彼女はリーザ。彼はヨシオ。バークさんとブラウンさん。道に迷つた僕を助けてくれた人達だよ」

「家の馬鹿息子を助けていただきありがとう。私はエランド商会の商会長をしているビリー・エランドだ」

「いえ、たいした事はしていませんよ」

すると背後から買い物でもしてきたのか野菜が入った籠を持った茶髪の女性が走ってくる。

「ああやっぱり、ミゲルなのね」

そう言つと瞳に涙を溜めてミゲルに抱きつく。

「母さん、ただいま」

ミゲルも瞳に薄っすら瞳が潤んでいる。スミスさん達も温かい目でその様子を見ている。

俺は前世の記憶のせいで、こんな時でも一歩引いて見てしまう。他人に対して心の底から喜んだり、悲しんだり、感動したり、出来なくなっている。そして自分の感情を無意識に隠している。

俺達はミゲルの家に通されリビングでミゲルの父、ビリーさんと話している。

ミゲルが今まで何をしていたかは事前に打ち合わせしておいた事をミゲルが説明していた。

山で薬草を探していたら、リザードマンに襲われて逃げたのは良いが、怪我をしてしまい。

その時に頭をぶつけ記憶を失い。俺達に助けられ。

一緒に旅をしていたが記憶が戻り帰ってきた。と言うストーリーだ。怪しさ満点だがどうやら信じたようだ。

「なるほど そうだったのか大変だったな… ホントに息子がお世話になったようで申し訳ない それでヨシオ達はもう宿は決めたのか？」

「いえ、まだ決めていませんこれから探そうと思います」

「それならわざわざ金を使う事はない家を使ってくれ、家のモニカが作る料理はボーダー1旨いぜ」

自慢げにビリーさんは言つとモニカさんとミゲルがうなずいている。

「それは助かります では泊めさせてもらいます 流石にタダでは申し訳ないのでこれを差し上げます」

俺は袋から赤ワインのビンを取り出すとテーブルに置く ラベルは付いていない中身はカルフォニア産のワインだ

「これは何だ？」

そうこの世界ではガラスが無い。窓も木製で出来ており、ワインはビリーさんが作る葡萄酒と作り方は同じだ。

「これは僕の国の葡萄酒で、この容器はガラスの瓶です」

俺はそう言うとソムリエナイフでコルクを抜く。持参のワイングラスに入れてビリーさんの前におく。

「どうぞ、ビリーさんの作る葡萄酒には劣ると思いますが」

ビリーさんはグラスやワインを真剣な表情で見て香りをかぎワインを一口飲む。しばらく味を確認して一気に飲み干す。

「これは旨い、俺の作る葡萄酒とはまた違う味だがこれは飲みやすく良いな。それにこの透明な容器まるで水晶のような綺麗なものだな」

「そうですね…このワインは5年前にこの容器に入れたものです」

「…5年も容器に入っていてこの鮮度凄いな」

この世界ではワインの熟成や保管は樽でしか鮮度は保てない

「実はこの容器に使っているガラスをこの大陸で作ろうと思っています」

「父さん俺、ヨシオと一緒に商売をするよ。良いだろ？」

話すタイミングを見ていた、ミゲルが言う。

ビリーさんは黙って何か考えているようだ。

「ミゲル、冒険者はどうするんだ？」

「ギルドの仕事を失敗したし、今更だけどやっぱり冒険者より商人の方が性に会っていると思う。それに今回の事で懲りたよ」

真剣な表情で父ビリーに話す。

「分かった、若い頃は何でもやってみる。だが途中で投げ出すなよ。父さんに出来る事は何でも相談してくれ、それにこのガラスと言う容器はうまくいけば良い商売になる」

この日の話は、これで終わり。モニカさんの手作り料理を堪能し、葡萄酒で夜遅くまで飲み明かした。

ん？俺も飲んだよ。この世界では未成年でも普通に酒を飲んで良いんだよ。あれ まだ誰かに言い訳を… 大丈夫かな、俺？

ギルドカード（前書き）

文章を確認、訂正しています。

ギルドカード

翌朝

俺の朝は早い、何時も体を鍛えている。

前世は、召喚された時に加護や身体能力を付与されていたので人外の力を持っていたが。

今は地球で研究した魔術と鍛えた体と前世の経験だけだ。

なので体は鍛えている。そんな訳で今俺は朝の薄暗い中を筋トレのあと、走りこみながら町を探索している。

漁師達は、漁に行く準備しているが、その他人とは出会わなかった。

町の道や建物を見るだけでも収穫はあった。

（今の俺が魔術で何処まで出来るか試さないといけないな。それに転生してから戦ってないから感を取り戻したい。落ち着いたらモンスターの討伐でもするか）

そんな事を考えながら走っているとミゲルの家に付いた。水浴びをして部屋に戻ると、スミスさんが待っていた。

「お帰りなさい。新田君朝部屋に居なかったからびつくりしたわ。今の私たちは、貴方が頼りなのよ。黙って1人で行動しないで欲しいわね」

スミスさんの視線が痛い。でも何だろう美人にこんな目で見られるのも悪く…な…　なんか今危ない道に行きそうになったな…

「すみません。スミスさん…」

義雄は頭を下げる。

「…もういいわ。今度から気を付けてね。今日の予定を確認したいけど良いかしら？」

「はい、まず何をするにもお金が要ります。金塊と人工水晶を売れば、開業資金ぐらい余裕で足りるはずですよ」

80mmの占いの用的人工水晶（1800円）を5個持ってきている。水晶や宝石は魔道具の材料や装飾品などで地球より需要は高い。

こんなに大きな水晶球は、この世界では滅多にお目にかかれない。

金塊は、俺の貯金と米国からの今までの報酬で買った18kの100g金塊3本持ってきている。

この世界の通貨は大陸ごとに違う。

この神虎大陸は、小銅貨、銅貨、銀貨、金貨がある。

小銅貨10枚⇔銅貨1枚、銅貨10枚⇔銀貨1枚、銀貨10枚

⇔金貨1枚、各国で製造されておりコインには、表に神虎。裏には、偽造防止の魔法陣になっている。

仮に偽造しても魔法陣に魔力を流すと判別できる。

平均的な家庭の収入で銀貨30枚（金貨3枚）日本円で考えると、

金貨⇔10万円、銀貨1枚⇔1万円、銅貨1枚⇔千円。

「それからコミュニティギルドに行き商人として登録して。そのあと役所に行き商会の登録をします。ビリーさんが紹介状を書いてくれたので、簡単に登録できると思いますよ」

この世界でギルドと言えばコミュニティギルドだ。

コミュニティギルドは、冒険者ギルド、傭兵ギルド、自警団、ハンターギルド（犯罪者、モンスターの賞金首狩り）、魔術師ギルド、商人ギルド、職人ギルド、など複数のギルドを統合したギルドだ。

四大陸全てに存在する。国ごとの加盟制で、魔術や魔道具で情報管理されている。

業務は、民間の人材派遣会社に似ている。個人では定職を探せたり依頼を受けたり。

魔術師などの資格試験（有料）を受けて取る事で専門的な高報酬の仕事が出来るようになる。冒険者ランクや傭兵ランクなどもある。

依頼主は、国、貴族、商会、自警団、などさままだが依頼主にもランクがあり。

例えば、ゴブリンの集落撃滅20匹討伐依頼があったとすると、討伐に行ったら40匹居ましたなんて事になると依頼主のランクが下がり、手数料が高くなる。問題なく数多く依頼を出してくれる依頼主はランクが上がる。勿論手数料が安くなる。

ギルドに登録をしないとギルド加盟国では正規に商売が出来ない。商会の登録を国に登録する時にギルドカードが必要だ。ギルドカードには、登録者の血を使い魔力の魔紋情報を登録する。魔紋は、指紋と同じで他の人とかぶる事がない。

「ギルドカードが発行されたら物件を探す予定です。転送用の魔法陣を設置しないと物資やスミスさん達の帰還が出来ませんから。今日は、そんなところですかね。勿論米国の依頼も考えていますよ」スミスさんと話をしていると、バーグ少佐とブラウン中尉が部屋から出てきた。

「「おはよう」御座います」

「「おはよう」」

「おはよう、皆さんお揃いですね。朝食が出来たのでどうぞ」ミゲルが朝食に呼びきた。

ちなみにミゲルの兄は、葡萄酒生産の為農園に夫婦で住み込んでいるそうだ。

朝食は、パンと魚のスープでミゲル達と食べているとビリーさんが不意に思い出したように話してきた

「ところでヨシオは何処の国から来たんだ。あんな容器を作っている国なんて噂でも聞いた事が無いのだが…」

前もってこんな質問有るのは想定していたが突然だったのでビックリしたが話し出す。

「…これは秘密にして欲しいのですが。実は、僕の国は神竜大陸よりも遠くにある島国で今まで大陸とは交易をしていません。平和主義の国で自警団は、居ますが軍隊が居ません。神竜大陸の人間に僕の国が発見されると不味いので。大陸には、無い独自の輸送方法で遠くの国と交易をしようとしている所です」

嘘は言っていないよね？

「ふむ、そうか… 軍隊が無い国が良い国だな」

ビリーさんはそれ以上聞いてこなかった

ビリーさんの幼馴染が経営している店で貴族やセレブ相手に宝飾品や魔道具を売っているお店を紹介してもらった。

店の外観は貴族の屋敷のような感じで内装も豪華だ。

「いらっしやいませ」

美人の店員さんだ、他の店員も美人が多い。

「エランド商会の商会長の紹介で、売りたい物があるのですが…」

袋の中の金塊を見せる。

「はい、申し訳ありませんが店主を呼んでますのでこちらでお待ちいただけますか？」

「分かりました」

個室に案内され。美人の店員さんは店主を呼びに行く。

しばらくすると執事のような服装のダンディーな店主が現れた。歳は、ビリーさんと同じぐらいかな？マダムキラーって感じた。

「お待たせしました、店主のレイモンド・ゴードンと申します。おや、ミゲルじゃないか無事だったのだね 良かった…」
優しい表情でミゲルの頭をなでている。

「もう子供じゃないんだから、頭をなでなくてくれよ」

「私にとっては、ミゲルは何時までも子供だよ。それで何か売ってくれるそうだが…」

ゴードンさんが俺達の方に視線を移す。

「これを買って欲しいのですが」

俺は、そう言うと、金塊300g3本と水晶を5個出す。

ゴードンさんは水晶の大きさに驚きながらも鑑定を始めた。

金塊は、鑑定が先に出た。

魔術で金の質を確かめて重さを量る、金塊だけで金貨100枚になった。

この世界では、14kぐらいで質が高いと評価されている。金貨も14kぐらいだ。

水晶の方は、時間がかった。 無色透明でこの大きさの球体は、この世界では珍しい。

重機やダイナマイトが無いので手掘りで採掘している時代に、この大きさの水晶は滅多に出ない。

次に機械が無いので球体に綺麗に研磨するのは並大抵ではない。有る程度は、魔術で出来るが魔術師を雇うのは高くつく。水晶は、地球より需要が多い。宝石としての需要と魔道具としての需要がある。

「この大きさと透明な水晶球は久しぶりに見ました、5個全部で金貨500枚になります」

俺以外は驚いている。

ミゲルは「すげえ」とつぶやいて啞然としている。

「…分かりました、それをお願いします」

ゴードンさんの表情が一瞬緩む。多分俺以外は気づいていない。

多分交渉すれば、もう少し高く売れるだろうが今後もゴードンさんと取引する事を考えて、言い値で売る事にした。この世界では、言い値で取引するのは貴族くらいだ。

金貨600枚を受け取り、店を出てギルドに向う。

ギルドは、町の中心に位置している。城と教会の次に大きな建物でシンプルな構造で3階建てだ。

人が引つ切り無しに出入りしている中、受付の列に並ぶ。しばらくすると順番が回ってくる。勿論スミスさん達も登録する為に俺の後ろに並んでいる。ミゲルは、もう登録しているので並んでいないが。

「登録したいのですが」

「はい、では登録料銀貨1枚と、こちらにお名前を記入して。この魔法陣に血を一滴たらしってください」

スミスさん達の間も支払い。紙に名前を書き、ナイフで指に軽く傷を付け、血を魔法陣にたらす。この世界にも紙はあるがあまり質が

良くない、植物製だ。

「二階の初心者講習室に行っていたいただき講習が終わればカードをお渡しします」

講習内容をまとめると

職業ごとにギルドランクがあり。S A B C D E とあり職業は、冒険者、ハンター、傭兵、魔術師、商人、鍛冶職人などの専門職もある。職業によってランクの上がり方は違うが、試験や試験代わりのクエストで決まるそうだ。あとは、依頼を達成できない時の罰則の説明。犯罪を犯した場合手配され賞金首になる事もある。犯罪認定は、依頼人が申請してギルドで認定した者だけが対象だ。ギルドは民間団体なのだからお金が絡まないと動かない。加盟国は、その事を了承しないと加盟できない。加盟しないと経済的に厳しくなるのだ。

講習が終わり、金属製の魔法陣入りのギルドカードを受け取るとギルドが出る。

その頃、神聖デント王国 ”王妃の部屋”

そこには、濃い蒼の瞳に、長いストレートヘアの金髪でグラマーな美女が、この部屋の主。王妃ルナだ。
もう40近いはずだが、まだ20代にしか見えない。

それに比べ、若い頃の筋肉質だった体は、見る影も無くマツ。デラックス並みの巨体をした国王が冷や汗を出しながら話していた。

この国の実質的支配者の王妃は、隣国ナバーラ王国との戦争で思わぬ苦戦を強いられ、いらだっていた。

「あんな小国になぜ手こずるの。早く攻め落として頂戴」

「しかしルナ。籠城されては、あの難攻不落の城を落とすのには、決め手が無い。それに敵のゲリラ部隊が、補給部隊を攻撃してくるから物資が届かぬのだ…」

国王は汗を拭きながら答える。

「そんなの農兵を盾にして力尽くで戦わせなさい。農兵などいくらでも居るのだから。それに農兵が死ねば補給が少なくて住むでしょう！早く命令してきなさい」

ルナはヒステリックに言い放つと、国王を追い出した。

「まったく役立たずばかり。でもこんな所でつまづく訳には行かないわ。また召喚しなきゃダメかしら… 召喚の準備だけはして置きましょう」

そう独り言をつぶやいた。

竜の契約（前書き）

文章を訂正しています。

竜の契約

ギルドを出た俺達は、城の近くにある役所に向う。

役所の建物は石作りで、4階立て1階は国民向けの役所だ。

受付に居たのは、横柄な態度の中年のはげ親父で、周りに見えないように銀貨3枚を渡すと。

突然、丁寧な態度になり手続きがスムーズに運び。

ビリーさんの紹介状も有ったおかげで登録はその日の昼までに終わった。

ちなみに登録料と一年分の税金で金貨6枚かった。商会名は”アース商会”考えていなかったたので適当に付けた。

「ヨシオ、昼飯にしないか腹減ったよ」

ミゲルがお腹を鳴らしながら言ってくる（笑） 器用なやつだ。

「そうだな、ミゲルのおススメの店で良いから行こうか」

ミゲルに案内されてきた店は、何でも「俺の家母さんの実家が漁師で、魚料理が多く。たまには、肉が食いたい」と言って肉料理で有名な店に案内してきた。その店は、ギルドの近くにあった。

その店に入ると昼過ぎになのにお客でにぎわっていた。

「注文は、俺に任せろ！」とミゲルがハイテンションで言うのでまかせる事にした。

ミゲルは、里帰りしてかなり明るくなったかも。

ブラウン中尉は、違う意味でハイテンションだが。バーク少佐に「そんなにはしゃぐならもうつれて来ないぞ」と言われて大人しくなっていた。遊園地に遊びに来た子供じゃないんだから…

しばらく待っていると、肉料理が運ばれてきた。「オーク亭名物、オークのステーキだよ」言い、女将さんらしきおばさんが人数分のステーキを運んできた。

「オークか久しぶりだな」

俺が言う。

「オークってどんな生き物だ？」

バーク少佐が聞いてきた。

「豚みたいな生き物ですよ」

（ゴブリンのぐらいの身長の本二本足で歩く、醜い豚系のモンスターなんだけどね。知らない方がよいよね？）

味は、塩とにんにく味でハーブがきいている。大変おいしく頂きました。

ちなみに食事中、スミスさん目当てにからんで来た傭兵風の人居たが、バーク少佐に片手で撃退されていた。流石、米軍歴戦の精鋭部隊のエースだ。ブラウン中尉は、そんな中1人お替りしていた。あれ？ 君の仕事では… この人も精鋭部隊の仕官だよね？

オーク亭を出て。予定通り物件を探す事にした俺達は、ミゲルの案内で不動産屋に着くと、店主を捕まえて中古物件を見て回る。

みんなで相談した結果候補が2件にまで絞れた。立地は、表通りにより良いが、1階建ての狭い店舗物件と。裏通りにあるが、それなりに広い地下室がある2階建ての物件だ。

両方とも家具付きだ。ミゲルは、表通りの物件が良いと言ったが、スミスさんが裏通りの方が良いと言い。

俺も転送用の魔法陣を置くスペースを考えると裏通りの物件にする

事にした。

店主との粘り強い交渉の結果、金貨50枚値引きしてもらい、450枚即金で買い取った。契約書を交わし店主と一緒に役所に行き所有権の登録を済ませると、もう夕方になっていた。今日の所は、ミゲルの家に戻る。

ビリーさんに店舗物件を買った事を伝えると、こんなに早く買った事に驚いていた。ビリーさんの話だと競合店が無ければ立地はあまり関係ないとの事、ここは交易都市で数多くの商人が出入りしているので良い物は必ず売れると言ってくれた。

夕飯にモニカさんの魚料理をご馳走になり、早めに部屋に引き上げて義雄は1人考えていた。

明日の事、米国との関係、何よりこの世界に来た理由。

まず軍資金を稼がないと始まらないな、それに資金よりも情報が必要だ。俺が16年前の情報しか今はないのだから…

それに米国が本気で異世界に力を入れてきたら厄介だ。

あくまで交易だけで止めて置くのが理想的なのだ。

俺は米国政府と交渉の過程で、異世界が急速に科学の力を手に入れたら地球にとって脅威になる事を伝えている。

今でさえ地球から人間を拉致できる力があり。今のままでも要人が誘拐される可能性。仮に手に入れた、科学力で作った爆弾を好きな所に魔術で送る事も考えられる事などだ。

いきなり爆弾がホワイトハウスに転送されたら？

街に転送されたら？

核施設に転送されたら？

少なくとも俺には可能だ。爆弾を召喚して核施設に転送すればいいと終わりで。

俺が提案したのは、まず交易を行ない。情報を集め、経済から影響力を持つ事だ。

経済的利害があれば対立はあっても戦争は興り難い。それに先にこちらで魔術を学び防衛対策を取れる事。しばらくは水面下で行動するのが得策である事を説明し合意した。

勿論こちらの魔術、薬、この世界でしか無い物を地球に送り。異世界でオーバーテクノロジーになるような物は、こちらになるべく持ち込まないようにしなければならない。

ガラスは、今異世界で有る技術で作れるので了承を得ている。米国から送られてくる物資だけでは 怪しまれ要らぬ詮索をされると厄介だ。

スミスさん達は、情報収集とこちらの薬を持ち帰る事が今回の目的だが、恐らく俺の監視も任務のはずだ。

強すぎる個人の力はその人間にとって幸福なのだろうか…

要らないトラブルを抱え込むだけでは？ 例えば仲間だった人間に背後から襲われるような。

義雄には答えが出なかった。少なくとも前世のような事だけは避けたい… 前世では与えられた力だったが、今は違う。

義雄は、そんな事を考えていると睡魔に襲われ眠りについた。

時は少しさかのぼり、義雄が再び異世界にやって来た日。神竜大陸の聖域とされる ” 竜の里 ”

彼女は見かけの歳は18歳ぐらいか。10人居れば、10人が美少女だと言っだろう。

肌は透き通り。綺麗なストレートの黒髪は腰にまで届いており。その黒い瞳は窓の外に向けられていた。

だが、竜の里の山々を観ている訳ではなかった。その瞳はもっと遠くを見える筈もない。

彼女が愛し。 “ 竜の契約 ” を交わした、 唯一の契約者だった彼女の事を見ていた。

しかし彼は、16年前に魔王と共に死んでしまった。

彼が仮に生きて戻ってきてても自分の思いが、かなう事は無いと分かっていた。

何故なら彼はあの女を愛していたのだから…

だが彼女は、彼の側に居たかった。それで良かった。たとえ彼が振り向いてくれなくても…

彼女はあの日、彼を背中に乗せ魔王の城に送り届けた。無数の魔獣と戦い怪我を負い。力尽きようとしながらも。今思えば最後まで付いて行けば良かった。

彼の盾ぐらいにはなれたかも知れない。

彼女は、仲間に助けられ辛くも生き残った、生き残ってしまった。

あの日死んでしまえば、どんなに楽だっただろう。彼より先に死ねたのだから。

彼女の全てだった。何よりも大切なあの人を失ってしまった。

16年前のあの日から生きる氣力を失っていたが、あの人との “ 最

後の約束“で彼を追って命を絶つ事を出来なかった。

今考えれば、彼は死ぬ事を分かっていたのかも知れない。彼女が魔王の城に彼を送り届け私に言った「お前は生きる　生きて帰れ　約束だぞ」彼女は嬉しかった。たとえ一瞬でもあの女の事ではなく、自分の事を考えてくれた、それだけで…

信じたくないが彼は死んでしまったのだ。“竜の契約”を交わした彼女が一番分かっていた。契約を交わすと契約相手の魂がこの世界に生きている限りその存在が分かるのだ。

そしてその日は突然やって来た。彼の波動を感じたのだ。

何故なのかは分からない。理由など、どうでもいい、私があの人^の波動を間違えるはずがない。

たとえ彼がどんな姿でもいい。彼女は、文字通り飛んで彼の元に向った。

そして、彼女の16年間止まった時間が動き出した。

開店準備（前書き）

誤字脱字は発見次第更新しています

開店準備

日本、新田家

義雄がスミスさんに連れられて家を出て行った後。

夏休みが終わり。一週間がたった平日の放課後。短髪で部活の夏合宿で日焼けし、女子高生にしては引き締まった体で走って来たのだろう。息を切らせ健康的な汗をにじませ、新田家にやって来た。

彼女の名前は、”秋葉 優” 義雄の幼馴染だ。

彼女の母が心配するぐらい性格が男っぽい彼女が、物心ついた頃から義雄と一と彼女で毎日遊んでいた。

彼女はいら立っていた。

何故なら夏休み突然義雄が泊まり込みで禁止されている筈のバイトに行く^{せう}と連絡があつたきり音沙汰がなく。

学校が始まって見れば先生は「新田君はアメリカに留学しました」と隣に住んでいる私でさえ知らない事をほざいたのである。思わず優は、教室で「は？」と声をあげてしまった。みんなの視線が痛い。先生を問い詰めても「私もビックリしたのだけど、校長先生に今朝聞かされたので、何も知らない」と言うだけで何も分からず。

放課後校長室は、さっきまで誰か居たのかエアコンの涼しさが残ってはいたが、もぬけの殻で。

はじめを捕まえて問いただしても何も知らなかった。

その日急いで家に帰り。義雄の母と友達である母に聞いてみたがバイトの事は、聞いていたが留学の事は知らなかった。

義雄の家に行つて見たが共働きの新田家では、誰も居ない。

義雄の母の店は、新装開店したばかりで店も忙しい。毎晩遅くまで

仕込みをしているらしく帰りが遅い。朝は寝ている。

義雄の父と兄は常連のお客さんで、いくつもマンションを所有している金持ちが、夏休みに使う軽井沢の別荘をリホームする為に出張に出ている。

山の中なのか携帯もつながらない。流石に別荘の電話番号まで調べる事は出来なかったが、そんな日々が一週間続き。

義雄の母が経営するレストランの定休日に義雄の母を捕まえる事が出来た。はじめと待ち合わせをして義雄の家に来ている。

「おばさん！どう言う事ですか？いきなり泊まり込みで校則違反のバイトに行ったと思ったらそのまま留学なんて… 義雄やお兄さんにも携帯もつながらないし」

優は瞳を潤ませながら義雄の母に詰め寄る

「落ち着け 優」

はじめがなだめる。

おばさんは「ごめんね、優ちゃん。義雄には、優ちゃんに連絡するように言っただけど…」と言い“おばさんが知っている事実”を話し始めた…

だが私は、後になって知る。おばさんの知る事が真実でない事に…

ボーダー城下町

義雄達は、店を買った次の日。店に行き掃除をしながら馬車を運び転送用の魔法陣（ステンレス板）を地下室に運び。いつでも転送できる準備を昼前には終えた。

モニカさんが差し入れを持ってきてくれた頃には一通り掃除が終わった所だった。

差し入れを美味しく頂き、俺とスミスさんブラウン中尉で午後から馬車に乗り買出しにでた。ミゲルとバーク少佐は無線機のアンテナ設置の為、店に残った。

その日に仕入れたものは、
レンガ（ガラスの溶解炉用） 薬草図鑑（冒険者の採収用） 薬屋
にあった薬全種類 初級の魔術書 大陸の地図（大まかな） こ
の世界の服 自炊用の食材 など

俺は、買い物しながらも店主や店員と日常会話しながら 情報をこつこつ集めていた。 情報屋なんて都合の良い人が居れば苦勞はしない。

買い物を終え、帰りにギルドに来ている。 アース商会の従業員をギルドで募集する為だ。 受付に行き手続きをしたのだがこんな感じだ。

依頼主： アース商会

仕事内容： 交易品販売 製造販売

募集人材： 1 . 装飾職人 鍛冶職人 又は経験者

2 . 販売店 店員

1 . 2 . 長期できる人 人種不問

報酬： 1 . 月々 銀貨 50枚 能力しだいで優遇

2 . 日給 銀貨 1枚 + 歩合

勤務地： ボーダー町・ギルド裏通り
参考： 新規店舗オープン。詳しくは面接で

ギルドに手数料を払い、これでギルドを経由し面接に人が来るはずだ。

何かハローワークみたいだね…

手続きが終わり、参考到他社の募集を見ようとギルドの掲示板に行く人と人集りが出来ていた。

よく見るとみんな何か1つの依頼を見て話しているようだ「食料の行商でこんな高報酬初めて見たぜ」とか「殺されに行くようなものだろう」や「こんな依頼受ける奴いるのかよ？」など話していた。

俺は興味が湧き。ギルドの商人用の掲示板に貼られた依頼書を見る。

依頼主： ガルシア商会 ボーダー支店

依頼内容： 1．緊急行商依頼 薬と食料の輸送販売

 2．商団の護衛（詳しくは傭兵用掲示板で）

報酬： 出張料 金貨200枚＋販売利益

行商先： ナバラ王国 ガルシア商会 王城仮設店

条件： 1、馬車所有者 商人ランク：E 以上 出発は

3日後朝5時

参考： ルイス騎士団護衛あり

片道1週間予定往復で30日を超えた場合

追加報酬 10日ごとに金貨100枚

支払い方法 帰還後ギルド報酬窓口（販売料金

は現地）

馬車7台で締め切り 2台未満で中止

普通なら破格の依頼である。ナバラ王国が戦争中で王城に籠城していなければ…

護衛のルイス騎士団は、ルイス將軍率いる騎士団でルイス將軍は魔王との戦争で勇者と共に四魔將の1人を共に倒した英雄で、大陸で5本の指に入る名將なのだ。

彼の指揮で大国、神聖デント王国とここまで戦争で互角に渡り合い今も戦争が続いている。

（ルイスには借りが有ったな、それに相手は…）義雄は、依頼を受ける為ギルドの受付に向い歩き出す。

その日の夜、アース商会・本店

設置した無線機で、ホフマン大佐と連絡を取り（距離の関係でしばらく無線連絡できなかった）地下室に設置した魔法陣を使い、物資の運び込みと今日仕入れた薬などを送る。

本来であればこれでホフマン大佐とスミスさん達は、今回の探索を終え帰還する予定だったが。

義雄が設置した結界魔法陣が優秀で、安全が確保された事と植物の採取と生き物の捕獲があっさり成功した事で、米国本土から新たな命令が下された。

異世界の基地に常時米軍の駐屯。司令官にホフマン大佐、それと…大統領の特使が転送魔法陣を使いホフマン大佐と視察に来たのだ。

ホフマン大佐が来るとブラウン中尉は人が変わったように率先して働き出した、この人って… しかも動きが機敏だ。

スミスさんは特使と共に一時帰国でバーク少佐とブラウン中尉は俺の店に常駐するそうだ。ホフマン大佐いわく「何をやらせてもいいからこき使ってくれ」との事、ホフマン大佐やスミスさん達が帰還すると思っていた俺は、あの依頼を受けた事を話していなかったの

で、スミスさんが怖いから特使が来たときに話した。 あっスミス

さんが睨んでる視線が痛い…

「その依頼はかなり危険なのだね？」

特使が俺に話す。

「はい 常識で考えれば 死に行くようなものです ですが…僕なら平気です」

「ほお…何故平気なのだね？ それに無理しなくても金は稼げると思うが」

スミスさんが激しくうなずいている。

「僕には、地球で研究した魔術がありますから。いざとなったら魔術で逃げられます。これは、前世で受けた戦友への借りを返す為です。反対されるのは理解できますが 僕はなんと言われようとも行くつもりです」

“戦友への借りを返す為”と俺が言った時にホフマン大佐とバーク少佐の表情が変わった気がした。ブラウン中尉は僕の後ろで視界に入っていない。

特使は考え込んでいる。

「新田君、恐らく君が考えているより、我が国は君に期待している。その証拠に私が今ここに来ている。君の覚悟は分かった、君の言う事を信じよう。だが…護衛にバーク少佐とブラウン中尉を連れて行くのが条件だ。確かに君の今の立場は民間企業の代表だが、我が国と契約関係にある事を忘れないで欲しい」

「ありがとうございます特使」

俺と特使は握手をして夜の街を案内した。しかしブラウン中尉は、物資の整理とガラス溶解炉の製作でホフマン大佐が連れてきた部隊の指揮をする為に留守番を任された。ホフマン大佐が居ないところで愚痴っていたのは、黙って居てあげよう（笑）

特使は、街の視察を終えるとそのまま直ぐにスミスさんと共に帰還した。

ガラス溶解炉は、ブラウン中尉と兵士達のおかげで次の日の夕方には完成していた。

その間ミゲルと俺は、昨日運ばれた商品を棚に並べ。値段設定をして。昼には、だいたい値段設定は終わったので俺はバーク少佐と二人でナバーラに運ぶ食料などを仕入れに市場に行き。仕入れを終えて帰って来た時には、日が傾いていた。

商品

コップ ビー玉 瓶 ルーペ （窓ガラスなどは自作予定） 杖（魔道具） 指輪（魔道具） ネックレス（魔道具） 石鹸 ろうそく（この世界にない） 香水（小瓶入り） 胡椒 砂糖 紅茶葉 緑茶葉 飴 炭 網（魚業用）

こんな感じだ。

最初から飛ばすと目立つので地味にスタートだ。ナバーラ王国から帰還しだい、いろいろやって行こうと思っている。しばらくはミゲル店長に任せる、面接も経営も。ミゲルの実力を試すのに良い機会だ。

それに俺が出発する日にスミスさんが戻ってくる予定なのだ。転送魔法陣は、ミゲルに使い方を教えたので一日一回ぐらいは問題ない。それ以上は魔力が厳しい。バーク少佐とブラウン中尉の代わりの兵士も滞在する事になっている。

神竜大陸西端のとある村近くの畑

農夫である彼はその日、野菜の収穫の為に「機嫌で毎日通う畑へ向う道を木製のリヤカーを引いていた。

「今年は豊作だあゝなあゝ 神竜様のおかげだっぺ」と独り言をつぶやいていると突然あたりが一瞬暗くなる。

農夫は何がおこったのか分からず、反射的に空を見上げる。「…神竜様」と言うと腰を抜かしその場に尻餅をつき、神竜様が飛んで行った西の海の方を拝んでいた。

ルイス將軍（前書き）

文才が無くご迷惑をお掛けしています。

ルイス將軍

ナバーラ王国、ルイス騎士団野营地。

「閣下、ボーダーから補給部隊が出発いたしました」

若い騎士が、初老の將軍に報告する。

「補給部隊ではない。行商団と言え、気をつけろ」

ギルドに補給部隊を要請する事は、出来ない。何故なら戦争に介入する事になるからだ。傭兵を依頼するだけなら可能だがそれでは、今一番欲しい食料が城に届けられない。ナバーラ王国の騎士がパテイング王国に行って、物資を調達させる手もあるが。外交問題と戦争中に戦場から騎士を長期間割く事は出来ない。行商依頼は苦肉の策なのだ。

ナバーラ王国は、王城に籠城してルイス將軍が敵の補給路を断ち神聖デント王国軍を追い詰めている。しかし、肝心の王城にも補給が届かないのが難点で、開戦時、かなりの備蓄があつたが消費し残りわずかである。

別の騎士が現れ。

「閣下、軍議の準備が整いました」

「分かった、直ぐに行く」

（あんな腐れ外道の国に負けぬ）
ルイス將軍は心の中でつぶやく。

パテイング王国、ナバーラ王国との国境近く

店をミゲルとスミスさんに任せた義雄は、商団に参加していた。義

雄の馬車を含め、全部で4台の馬車が並んでいる。義雄以外の参加者は、ナバーラ出身の商人達で、命を賭けて参加している。護衛は、47人で構成されている。

モンスターとの遭遇は、有ったが傭兵達が退け。ここまで順調に旅を続けていた。

「二人とも魔力をコントロール出来るようになって来たようですね」
バーク大佐とブラウン中尉は、異世界に来てから魔力を感じるようになり。

魔力をコントロールする特訓をし始めていた。

「早く魔法使いたいぜ」

ブラウン中尉が言う

「そうですね、帰ったら教えますよ」

しばらくすると国境に着いた。迎えに来ていた、ルイス騎士団の小隊と合流して直ぐに出発した。

騎士団の小隊長の話では、王城から西側は、神聖デント王国の兵隊は、あまり居ないらしく。これだけの護衛が居れば、王城近くまで大丈夫だと言っていたが国境を越えた事で、商人達は緊張していた。

その緊張している中、ブラウン中尉が… 野営中に傭兵で参加していた、虎人族の女性を口説いていた… ちなみにブラウン中尉とバーク少佐は、この大陸の言葉がしゃべれると言っても、まだ片言でしか話せない。

俺達は、直接王城に行くのではなく、ルイス將軍と合流して向うそうだ。

ルイス將軍の野営地は、敵に場所を知られない為に、毎日のように移動している。合流方法は、迎えが来るそうだ。

俺は、国境を越えてから魔術で周辺を探っている。それで気づいたのだが、どうやら商団らしき集団が俺達の前を先行している。保険の別部隊か囃部隊、もしかすると俺達が保険かもしれない。

ルイス將軍は今回の商団を集めたのには、もう一つの理由があった。ギルドに依頼を出す事により。商団の存在は、当然神聖デント王国側にも伝わっている。ナバーラも食糧不足だがそれ以上に神聖デント王国の方が不足していた。デント軍が商団を襲い食糧を奪うと見込んでルイス將軍は、囃部隊を用意していた。

囃部隊先頭

「どうやらお出ました、姿を現したら予定通り一旦逃げるぞ」

するとデント聖騎士団が囃部隊に矢を放ち、聖騎士達が食糧を奪う為襲い掛かってきた。偽傭兵や偽商人達は、馬車を置いて森の中に消えていく。

「所詮金目当ての奴らだ、逃げ足が速い」

聖騎士の指揮官がそう言うのと馬車の中を確認しようと荷台を開ける。しかし、中は食糧ではなく。ゴブリンがぎっしり詰まっていた。聖騎士の指揮官は、驚いて一瞬固まる。その一瞬が命取りだった。ゴブリンは、一斉に指揮官に襲い掛かった。他の馬車でも同じようにゴブリンたちが馬車から一斉に出てきた。指揮官を失ったデント聖騎士団は、浮き足立ち混乱するが流石に聖騎士、ゴブリンの数を減らしていく。その時、逃げたはずの偽傭兵達とルイス騎士団がデント聖騎士団に襲い掛かった。背後を襲われた、デント騎士団は全滅した。

「閣下。敵、ゴブリン共に全滅しました。それと本物の商団が来ました」

「良くやった、皆で苦勞してゴブリンを捕まえたかいがあったわい」
こうして商団とルイス將軍率いる本隊と合流した。

ルイス騎士団と合流した俺達は、野营地で明日の王城へ向う為、一晩過ごすことになった。

その夜、自分たちの野宿の準備をしていると、若い騎士1人引き連れたルイス將軍が現れた。商団を見て回っているようだ。

「良く来てくれた、明日はわしが命を懸けて王城に連れて行くから、死ぬでないぞ」

ルイス將軍が俺に言う。

当然だがルイス將軍と義雄で会うのは、初めてなので前世で勇者だった事など分かるはずがない。

「ところでおぬし達は、ナバーラ出身では無いようだが何故こんな依頼を受けたのじゃ」

（借りを返しに来たのだよ。ルイス）心の中で思う

「僕は商人です。勿論お金の為ですよ、閣下」

「ふむ…命あつての金じゃろう。仮に王城まで無事に着いても、無事に帰れる保障はないぞ？」

「はい、存じています。デント軍の大軍に囲まれていてアリ一匹出入りできない事も…ですが王城に着いてしまえば僕たちは良いのです」

「ほう…一緒に籠城でもするのか？」

「いえ、僕は魔術師として転送魔術が使えます」

ルイス將軍は、驚きの表情だ。この世界でも転送魔術を使える魔術師は、数えるほどしか居ない。

「それは本当か…食糧を転送する事も出来るか？」

「勿論出来ます。僕が王城に行き魔法陣を作れば」

ルイス将軍は、少し考える。

「……君名前は？」

「義雄と言います閣下」

「詳しく話が聞きたい、ヨシオわしのテントまで来てくれ」
ルイス将軍に義雄が着いていく。

パティング王国、ボーダー城。

警備兵の彼は、何時ものように見回りに城壁を巡回していた。

彼が好きな夕日を見る為、海の方を見ると…

「なんだ？」

夕日がまぶしく分かり難いが黒い影のような者が飛んでいるように見える。

「まさか…ド・ドラゴン」

警備兵は、ドラゴンを発見すると警笛を鳴らし「ドラゴンが東の空から飛んでくるぞ」叫び回り、城内は騒然となった。ある者は弓を構え、ある者は槍を構え、ある者は天を仰ぎ。ドラゴンが来るのを待ち構える。しかしドラゴンは、城より離れた所を通過し兵士たちは、ほっと胸をなでおろす。

勿論、ボーダーの町もパニックになり。怪我人がだが、ドラゴンが通りすぎると落ち着きを取り戻した。

ルイス將軍（後書き）

そろそろのようです

ドラゴンガール？

彼女は必死で飛んでいた、何かに取り付かれたように飛んでいた。少しでも速く、また彼が遠くに行ってしまうような感覚になり。恐ろしくなり、休む事無く竜の里から飛び続けていた。

流石に神竜と言われるドラゴンでも、この世界を半周休まず飛ぶ事は、並大抵の事ではなく、疲労の限界が近づいていた。

彼はもう直ぐそこなのだ。もう少し、もう少し我慢すれば、彼の元にたどり着ける。

“もう直ぐ会える”とリアルに感じると。不意に彼女に不安がよぎる。彼は私を前のように優しく迎えてくれるだろうか？彼は一度死んでいる。果たして彼は彼なのだろうか、私の事を覚えているだろうか…そして彼女は考えるのを止めた。ばかばかしい彼は彼女なのだ。彼女にとって大事な人には変わりはないのだから。

デント軍、陣地

ナバーラの王城は、丘の上に建てられ、周りを絶壁で囲まれている。城門は北と南にあり、それぞれデント軍が陣取り、王城を攻略している。

デント軍は兵数約5万人（ほとんど農兵）、ナバーラ王城に籠城しているのは兵数約8千人（ほとんど騎士）。ルイス指揮下の兵は、

ルイス騎士団、義勇兵、傭兵、全てで1万人。城の中に非難した民間人は、逃げ遅れた人達でほとんど居ない。王都の民間人は、他の町に非難している。

そんな中神聖デント王国、国王から命令書が届く。

「馬鹿な…農兵を盾にして、大型魔法陣を作り。魔術で城壁を崩せだ…」

ナバーラ王国攻略の司令官、ヘラルド將軍は命令書を読むとそう言った。彼は魔王との戦争で勇者と共に魔王と戦った、英雄の一人であり。その事で、聖騎士から將軍になった1人である。

「しかし閣下、この命令は恐らく王妃陛下の御命令、従わねば首が飛びます」

彼の参謀が言う

「そんな事は、分かっている。分かっているからイラついているのだ…」

（あの女は、自分の命令に従わない人間には、容赦しない。仮に命令に従って敵を倒し過ぎても、疎まれ殺されるだろう、あいつの様に…結局あの女にとっては、自分以外の人間の意志など関係ない。俺たちは使い捨ての駒でしかないのだ）口には出さず、心の中で思う。口に出せば、首が飛びかねない。

「魔法陣の準備にどのくらいかかる？」

「あの城壁を崩す魔法陣を書くには、城壁から10m以内に半径1mの陣が必要で、敵の邪魔が無ければ、我々の魔術師総がかりで30分、詠唱に10分といったところですよ」

「10m以内に近づき、矢と魔術が飛び交う中魔法陣を完成させ発動まで40分。…選択肢は無いが、農兵には死んでもらおう。準備を頼む」

（やらなければ俺が殺される…）

だがヘラルド將軍は知らない。この命令がナバーラのスパイにより、ルイス將軍に筒抜けなのを。

ナバーラ王城近く　行軍中のルイス騎士団

「閣下、敵が動き出しました。やはり魔法陣を作るようです」

「分かったご苦労、予定通り敵が魔法陣を書き始めたら突入する」

ルイス將軍の作戦は、デント軍が魔法陣を製作中身動きが出来ないところを背後から攻め、城からの攻撃とルイス騎士団によって挟み撃ちにする。その隙に商団が城内に入る。魔法陣製作を阻止したら撤退する作戦だ。戦いが長引けば兵が少ないナバーラ軍が不利になる。

「バークさんもブラウンさんも無理して付いて来なくても良いですよ」

「新田君俺達は、君の為に付いて来たのではない。米国軍の兵士は命令があれば国民の為、何処でも行く」

バーク少佐が俺に言うのと微笑する。ブラウン中尉は、黙って親指を突き出す。

ブラウン中尉：さっき振られたばかりなのに…ありがとう。

「ヨシオ、声に出てるぞ…」

バーク少佐からつつこみが。ブラウン中尉は、馬車の隅っこでいじけている。

そんな中、出発の合図が出た。奇襲なのでラツパやドラではなく、ジェスチャーで小隊長同士の伝達している。魔術でも出来るが、魔力の流れから察知される可能性を考えて使っていない。敵は目前なのだ。

城壁に突撃を命じられた農兵達は、次々と敵の矢と魔法で倒れていく。彼らが受けた命令は、城壁にハシゴを掛け上り。中から門を開けることだ。だがハシゴを掛ける前にほとんど物は倒れて逝く。

補給路が絶たれ飢えた彼らに戦う力は残っていなかった。

それでも数で押しやつと辿り着いた者は、ハシゴを掛ける。高い城壁では、手に持てるようなハシゴでは届かないのだが…

待機しているものは、魔法陣の前に待機させられ盾になり倒れて逝く。

彼らは逆らう事ができない、何故なら村に残した家族が人質に取られているからだ。王妃の命令に叛き、滅んだ村は少くない。

ある者は、妻の名前を叫び。

ある青年は恋人名前を叫び。

ある若者は母の名前を叫び。

ある者は無言で死んで逝く。

その時、デント軍後方で土煙が上がる。

「敵だぁールイス騎士団が背後から攻めてきたぞー」
誰かが叫んだ。

デント軍はパニックになり、浮き足立つ。

魔法陣をめぐり攻防が始まる。

血煙が上がり。次々とルイス騎士団の騎士達が魔法陣めがけて敵を蹴散らしながら進んでいく。

遅れて商団の王城侵入作戦も開始される。

恐らく誰も気づいて居ないだろう。上空から迫り来るドラゴンの姿を

ドラゴンガール？（前書き）

毎回思うのですが、一話一話が短い気がする今日この頃です。

ドラゴンガール？

彼女は見つけた。間違いない。

戦場の中を城に向かって走る馬車の列。

彼が乗っているのはあの馬車だ。

周りの兵士達が彼の馬車に矢を射掛け、手に武器を持ち襲い掛かっている。

彼を再び失うなんて有り得ない。そんな事を私は…

“許さない” 彼女は怒り、咆哮する。彼を守る為に炎を吐く。

その場は地獄と化す。

彼を襲っていた人間たちは、炎に包まれ焼かれていく。

彼女は彼の馬車が無事か確認する。周りの人間達は姿を消し、馬車は無事に走っている。

そして、御者席に居る彼と目が合う。前と同じ、私と同じ黒い髪に黒い瞳…

彼が私の名前を呼んだ。

彼女は安心すると力が抜けていく、疲労の限界なのだ…

力尽き意識を失った、彼女は空中で竜化が解け、人の姿に戻りデント軍の上に落ちようとしている。

戦場の視線が全て彼女に集まる。

「不味い、バークさんあとは任せます」

義雄はまだ炎が残る、敵陣を走り出す。
バーク大佐は制止しようとするが間に合わない。

デント軍はドラゴンの襲撃を受けて、兵士は迷惑い収拾が付かない。

「馬鹿な、ドラゴンだと！しかも、あのドラゴンは勇者の……」
ヘラルド將軍は馬を操り、彼女の方に向う。

ルイス騎士団は

「閣下、魔法陣の破壊と魔術師を全滅させました」
若い騎士が報告する。

「敵の混乱に巻き込まれるな、固まって動け。あの娘を助け撤退する」

ルイス將軍も彼女を助けるべく進軍する。

義雄は今まで自分の力を意図的に隠してきた。

力を使い誰かに見られ、疎まれ、利用され、裏切られて捨てられる。
それが嫌だった。

彼の力は地球でPCを使い研究した魔術なのだが、魔術師が研究データを見ても一部しか分からない。何故ならもつとも大事なのは、
使い方なのだ。

使い方が分からなければあのデータは使えない。

勇者の力は誰にもまね出来ない。元勇者の彼でさえも。だが今の彼の力は、まね出来る力なのだ。彼の理論と使う技量があれば。

ほとんどのデント兵が迷惑う中、まだ戦う意思を失わないデント兵が義雄に切りかかってきた。地球から持ってきた日本刀で切り捨て

る。

前世で地獄を見てきた義雄に迷いは無い。
次々と義雄にデント兵が襲い掛かる。

「ちい、邪魔だ」

このままでは彼女が地面に叩き付けられてしまう、それ以前にデント兵に殺される

“間に合わない” 義雄の脳裏によぎる。

（守りたい者を守れなくて何の為の力だ）

そして義雄は魔術を使う、詠唱も杖も使わず一瞬で発動される。微妙な魔力の流れを見ていた者がこの戦乱の中に居たとしたら驚くだろう。義雄がほとんど魔力を使っていない事に。

義雄が放った光の柱は、あたりを包み込む。

光の柱に包まれたデント兵数千人は、一瞬で消えて無くなってしまった。

そして義雄は魔術で飛び、彼女を受け止め、さっきまで光に包まれていた所に降り立つ。

ヘラルド将軍は、彼女に落ちる方に向っていたがいきなり目の前に光の柱が横切った。馬が倒れ、地面に叩きつけられる。

ヘラルド将軍は、立ち上がり馬を見ると馬の頭部が消えていた…訳が分からず、回りを見渡すとそこに居るはずの兵士たちが消えていた。

そして、ドラゴンの娘を抱きかかえる男が立っている。

「貴様が…貴様がやったのか」

ヘラルド将軍は剣を抜き、義雄に向って構える。

勿論、ヘラルド將軍は義雄が勇者だった事など知らない。

「ヘラルドか…」

義雄はヘラルド將軍の方に冷たい視線を向ける。

「敵の將軍がここに居るぞ、討ち取れ」

そこにルイス騎士団が押し寄せる。

「クツ…この仇はとる」

ヘラルド將軍は義雄に言い放つと、近くに主人の居なくなった馬を見つけ、乗り逃げる。

ルイス騎士団が追いかける。

「深追いはするな、まだ敵の兵数の方が多い事を忘れるな」
ルイス將軍が部下に指示を出す。

ルイス將軍は義雄に歩み寄る。

「ヨシオ、君は何者なのだ…」

「ただの商人ですよ」

彼女を大事に抱きかかえたまま、義雄は笑顔で答える。

神聖デント王国軍は魔法陣の攻防とドラゴンと光の柱により、3分の1の兵が数十分の間に死に総崩れになり、生き残った兵たちも逃げ出し。ナバーラ王城の籠城戦は、思わぬ形で幕を閉じた。

ドラゴンガール？（後書き）

え？彼女の名前？まだ考えていません（キツパリ）良い名前ないかな…

勇者の墓（前書き）

誤字脱字など発見次第更新しています。

勇者の墓

笑って誤魔かせるわけも無く…

「ほお、最近の“ただの商人”は空を飛び、光の柱^{あんな}魔術が使えるのかのお」

「それよりも、リナを休ませたいのですが…」
義雄は大事に抱きかかえた、彼女を見る。

「おお、そうじゃ…リナは大丈夫か？」
ルイスは前世の頃、リナと面識がある。

「はい、意識を失っているだけです」
「そうか良かった。部屋を用意させよう」
ヨシオが何故あんな魔術が使えて、リナと何故知り合いなのか、あとで聞かせてもらおうぞ」

「はあ…」

(…面倒な事になったな)

俺は城に連れて行かれ、客室に案内された。

「ヨシオ、無事だったか」

部屋に入るとバーク少佐とブラウン中尉がいた。

「その子は…」

バーク少佐がリナに視線を移す。

「彼女はリナ、前世の頃の仲間です」

俺はリナをベッドに寝かせる。

「ヨシオ、どう言う訳か聞きたいのだが」

俺は米軍に詳しく前世の事を話していなかった。

ここまで“良く覚えていない”とか言って誤魔かしている。前世の事を覚えている事態異常だからね。老人が、ボケてる振りして誤魔化している心境だった。

（もう少し黙っているつもりだったけど、リナとルイスの事も有るし話すか）

俺が前世でも日本人で召喚され、勇者になった事とルイスが戦友だった事を話した。あの女に殺された事は言っていない、こっちの世界に来て思いだした事にした。

「なるほど、勇者に魔王か…ドラゴンまで居るからな」
バーク少佐がベッドの方を見る。

するとドアにノックの音がしてルイス將軍が入ってくる。

「ヨシオ、待たせたな。リナはまだ起きておらんようじゃな」

（まってるねえ…）

「わざわざ閣下自ら、何か御用ですか？」

「お主は商人じゃろう、馬車の食糧件じゃが他の商人達と同じ値段で良いか？」

そう言って値段票を俺に見せる。

（わざわざ將軍が来て話す事じゃないだろう。本題は他にあるくせに）

「…これで良いですよ、依頼の報酬も有るので十分です」

「そうか、ではこれにサインしてくれ…そうじゃ例の移転魔法件じやが、籠城戦が終わってしもうたからの」

「ええ、食糧の販売は必要なくなりましたね」

「そこでじゃが…どうじゃナバーラに支店を作らんか？」

（また籠城した時の補給の為か…）

「支店ですか…何か条件が有りますか？」

「戦時の補給じゃな、金は払うぞ。あと店舗はナバーラで手配する、店が城より離れていると不便じゃからな」

（凄く良い話だが…後が怖いな、だけど断る理由も無い）

「…分かりました、そこまでして頂けるなら断る理由はありません」

「おお、そうかそうか。細かい話は、文官と話してくれ」

ルイスがリナの方に視線を向ける。

「所で…リナとはどんな関係だ？」

（やはり来たよ…ぶっちゃけるか）

「竜の契約者です」

（あつ、驚いてる、驚いてる）

ルイス↓（新たに契約したのか…リナの事を考えると考えられんな。それにあれから竜の里を出てないはずじゃ）

「リナの契約者は死んだ筈じゃ、お主は新たに契約したのかの？」

「…死んだ理由が知りたくて、地獄から戻ってきた。と言ったら信じるかいルイス？」

ルイス將軍は固まっている。

「まあ、信じられないのが普通だろうね。リナが起きれば分かる事だよ」

ルイスから俺とルイスしか知らない事を聞かれて。全て答えた。

「……………1人で来て正解じゃっな、まだ信じられんが。本当見たいじゃな」

「この事は秘密にしてもらいたい、その方がお互いの為だ」

俺が元勇者だなんて言っても信じる奴の方が少ないだろうし、今度は本気で攻めてくるだろうな、あの女が。まあ、ばれてもやりようはあるが…

例えば、リナに俺が元勇者だと証明させて、あの女に殺されました。

とか暴露すれば面白そうだ。
だが、単純な復讐が俺の夢じゃない…復讐は目標の1つに過ぎないのだから。

「そのようじゃの、努力しよう… 何にせよ明日、国王に謁見してもらおう。あれだけ目立ったのじゃお主が誰であれ」
まだルイス將軍は、義雄が勇者なのが割り切れていないようだ。

「……断れないか、店舗代だと思ってお会いしよう」
こうしてナバラ王との謁見が決まった。

神聖デント王国、勇者の墓。

ナバラ王国、王城で戦いが行われている頃。今はほとんど人が来なくなつた。勇者の墓の前で身長は170cm半ば、金髪で蒼い瞳、一瞬女性かと間違えるような中性的な顔立ちをした。見掛けは20〜30歳ぐらいか、エルフより耳の形が突き出ておらず、人間よりは突き出ている。彼はハーフエルフだ。

「師匠…貴方は馬鹿だ。あれだけ忠告したのに…あんな女に騙されて…」

ハーフエルフの男が勇者の墓に語りかける。

「校長、そろそろお時間が…」
傍らにいる、彼の部下の女性がハーフエルフの男に言う。

「分かっていきます… 行きましょう」

ハーフェルフの男はもう一度墓を見る。墓石には刻まれていた。
“勇者、ヨシヒコ・ムラカミ”ここに眠る。

ハーフェルフの男はその場を立ち去った。

勇者の墓（後書き）

前世の勇者の名前を書くのは、もう少し後になる予定でしたが書きちゃいました。

ミゲル店長

アース商会・本店

俺はミゲル・エランド18歳。俺の夢は神虎大陸1の商人になる事だ！

え？こないだまで冒険者だっただろう？俺が冒険者になったのは、金を貯めて店を開く為だったのさ！なに？後付けだろう？細かい事は気にするな。

今はアース商会の店長だ！俺の野望の第一歩だ。

まだ18歳の俺が店長になれたのは、冒険者になろうと腕試しに簡単な薬草の採取依頼を受け、近くの山に薬草を採取に行った時だった。

突然目の前に黒い渦が現れ吸いこまれ意識を失い、気が付くと知らない天井だった。

何だかふわふわした気持ちいいベッドの上に寝ていた俺はあたりを見回す。

部屋の中なのにやたら明るい、あれ俺死んだ、ここは噂に聞く天国？部屋の中は真っ白だ、そして部屋の壁の一面が鏡になっている。

俺は唖然とした、だってこんなに綺麗に写るきらきらした鏡なんて見たことがない。母さんが持っている鏡は青銅製でピカピカに磨いて鏡にしているけどこんなに綺麗に写らない。やっぱり天国かな、

ここ…

しばらくすると神様？白い袋を全身に着た、おっさん二人が部屋に入ってきた。

あつ、神様をおっさん呼ばわりしたら地獄に落とされるよね…気を付けなきゃ。

「あのーすみません失礼ですが、神様ですか？」

「。@#\$%&!*▼/¥*/」

「……あのー神様、言葉がわからないのですが、もしかして神語？」
「6¥\$%#〃〓*?#」

「神語が分からないと地獄行きとか言わないよね…言われても、言葉分からないけどね」

最初の一週間は、神様かもしれないと思い。知らん間に地獄とかに落とされたら嫌なので神語（仮）を覚えようと身振り手振りでお互いに少しずつ言葉を覚えた。それにしてもここの食べ物ものすごく旨いこのハンバーグとか言う食べ物は最高だ、多分何かの肉なんだろうけど旨いからから何でも言いや。でも母さんの魚料理が恋しくなる今日この頃だ。

あれから3ヶ月ぐらいたった。片言だが話せるようになって分かったけど、このおっさん神様じゃないスタークとか言うおっさんだ。地獄に落とされると思って損したぜ。

ここは地球とか言う所で米国と言う国らしい。今日その国の役人が来た、それがさあ…その人が天使なんだ！いや、女神様か？名前はリーザ、僕の好みと真ん中だ。

しかもこの人にも言葉を手取り足取り教えてくれと言うじゃないか

！（たぶん片言しか分からないからそんなにニアンスだったと思う）明日から楽しみだ。でも帰りたいな…とりあえずこの部屋から出たい。

あれから何ヶ月たったあろうもう覚えていない。相変わらずこの部屋から出してもらえない。ええーい、実力行使だ！これでも学園都市の魔術学校卒業生だぞ！落ちこぼれだけど…どうせ魔術師最低ランクのEさ（涙）フォークで指に傷を付けて床に血で魔法陣を書く、血で魔法陣を書くと魔法の威力が上がるし他に書くものがない。詠唱してファイヤーボールをドアにぶちかます。筈が…ドアが少し焦げただけで終わった。

おかしい…いくら俺が落ちこぼれでも、もっと威力があつたはず。すぐにおっさん達が押し寄せてきて、俺は平謝り。そしてどうやって火を出したか質問攻めに…あれ？魔法の事このおっさんたち知らないぞ。

次の日から変な紐を付けられて魔法を使わせられた、実験をしているみたいだ。学校で友達に聞いた事があるが、とある国では奴隷を使って人体実験をしているらしい、ほとんどの奴隷は死ぬそうだ。俺も殺されるのかな…

そんな人体実験がしばらく続いた頃、ホフマンっておっさんが来て写真とか言う写真し絵を見せられた。ゴブリンとかモンスターの絵だった。でもこの絵、パティンクの宮廷画家でもこんなリアルな絵はかけないぞ…そもそもゴブリンなんて絵に描かないか。

それから何日かたっただろうか、もう日にちの感覚がない。この部屋に窓がないし太陽が見えないのもあるが、明るいから日にちを数え難い。

その日、俺は初めてヨシオに会った。

「……………」

「はじめまして、義雄・新田と言います」

え？この世界で俺が教えた、人間以外に言葉が分かる人間は始めてだ。

しかもリーザさんより発音がいい！

「はじめまして、ミゲル・エランドです」

俺は言葉が分かるのもあるが、同年代なものも有ったかも知れない、ヨシオといろんな話を話した。

驚いた事にヨシオは俺の故郷の事も勇者の伝説の事も知っていた。そして最後にヨシオは俺に「何とかミゲルが故郷に帰れるようにがんばってみる」と言ってくれた。俺はその日ベッドの中で泣いた…嬉しかった。少しだけ希望が持てた気がした。

その後、本当にヨシオがああの部屋から俺を故郷に連れてきてくれた。しかも店長にまでしてくれた。がんばって稼いでヨシオに恩返ししたい。

それに…神虎大陸で1番の商人になってその商會長にヨシオをしてみせる！

店員募集で面接した10人中半分は元冒険者やら元ハンターなどで話し方が客商売に向いていない。職人なら話し方は関係ないのだけど、店員になりたいそうだ…

残りの5人は元メイドが2人、元宿屋の店員（男）が1人、経験なしの町娘が1人、虎人族の女性が1人、この中から選んだ。

元宿屋の店員は冒険者と話し方が大差ないので却下。元メイドさんの1人は60歳ぐらいのおばあさんなので却下。若くてかわいい方がげふげふ…お客様が喜ぶだろう。もう1人のメイドさんはその点で採用、リーザさんの方が綺麗だけだね。町娘は…みなまで言うまい却下。虎人族の女性は、力もあるし愛想もいい、それに働くところ

るが無いらしく必死でお願いされた。やる気も有るし採用。残りは職人だ。

職人の募集には3人着た。一人目はドワーフの中年ぐらいの女性、ドワーフの鍛冶職人は優秀だがドワーフは男尊女卑が強い、女性が職人なのはかなり珍しい、ドワーフの職人は貴重だ、なかなか見つからない即採用。

残りの2人は、装飾職人で今までブレスレットやネックレスを作っていたそうだが、勤めていた商会長が引退して店を売り、それで失業したそうだ二人は同僚だ。ガラス加工には装飾職人が欲しい、二人とも採用。

ガラスの加工方法は、ヨシオが本を書いてくれたのと、リーザさんがPCとか言う箱を使って説明してくれるそうだ。

店員の教育（商品説明など）をして開店だ。職人は、俺は教えられないので試行錯誤して覚えてもらおう。

ナバラ王国、謁見の間。

「ヨシオ、我に仕えてみぬか？」

（どうしてこうなった）

開店（前書き）

誤字脱字など修正しています。

開店

ナバラ王国、謁見の間。

「ヨシオ、我に仕えてみぬか？」

ナバラ王国は、神聖デント王国とパティング王国に挟まれた小国だ。

小国と言っても領土は、パティング王国より広い。だが山や森が多くモンスターも多い。人間が住める所が少ない為に小国なのだ。パティング王国も同じようなものだが交易で栄えている。

一番多くを占める税収は、通行税でパティング王国や神聖デント王国へ行き交う商人たちの税収だ。

今回の戦争で主な貴族は逃げるか殺され、ナバラ王国は、激しく人材不足なのだそうだ。

それに比べ、少ないながらもルイス騎士団を代表に優秀な軍隊が揃っている。日頃から交易商人の安全を守る為、モンスター、盗賊など討伐を頻繁に行っているのも影響している。

義雄は膝を付き謁見の間でナバラ王と謁見している。謁見の間には、宰相とルイス將軍その他は護衛の近衛隊の騎士しか居ない、王城の重臣達は、国外に逃げたそうだ。

神聖デント王国は聖戦を掲げ、皆殺しする勢いだったらしいからな、

この宰相は、逃げた前宰相の変わりに就任した。元は国王の身の回りを世話していた執事だったそうだが… この国大丈夫か？

ナバーラ王は前世で会った事がある、俺の記憶が確かなら80歳ぐらいだ。

「いや頼む、仕えてください」

「はあ…」

拝まれても困るのだけど…俺の魔術を見たのと商会長と言う立場、なによりルイス將軍の推薦（頼んでねえ）があり。ナバーラ王は土下座する勢いで頼んでくる。人材不足は分かるんだが…

「よし！今なら爵位もつけちゃうぞ」

（なんか通販の社長みたいにドヤ顔されても困るんだが…あつ宰相も拝み始めた）

宰相なら「こんな何処の馬の骨とも分からぬ、やからを貴族にしてはいけません！陛下」とか言うのが普通だろ…まあ元執事だからな。

確かに商会が成功したらどっかの国の貴族になって見ようと思っっては居たけど… この世界では、貴族＝領主だ、無税でもある。日本の大名をイメージして欲しい。

今この国で領地をもらっても良い事が無い、通行税は国の税収になるし戦争で農地は荒れている。間違いない持ち出しで領民を食わせる事になる。しかも再び神聖デント王国軍が攻めてきてもおかしく

ない。

ルイスがにやりと俺を見て国王に話し出す。

「陛下実は…ヨシオは、ゆう「分かりました、微力ながらやらせていただきます」…」

ルイス将軍が義雄を見てニヤついている。

（汚いぞ、ルイス。いきなりばらそうとしやがって、勇者だった事がばれるといろいろ不味い。）

「おお引き受けてくれるか」

（ちっ、ルイスにばらすんじゃないかった）

宰相と抱き合っている…確かに俺が受けた事で国費を使わず、何処かの領民が飢餓から救われるかも知れないからな。

「ですが陛下、僕は商会を始めたばかりの若造です。しばらくは領地の開発と商会の運営に力を入れたいのですがよろしいでしょうか？」

貴族が商会を経営するのは珍しくない、地球の貴族も会社を経営している。

「もちろんじゃ、領地と爵位は早々に決めて与えるぞ」

「ありがたき幸せ…」

（どうしてこうなった）

計画が狂ってくるな、米国との関係が予定より長くなるかもしれない。

俺は部屋に戻るとリナが寝ているだけで他には誰も居ない。
昼飯を食べに食堂にでも行っているのだろうか？

俺は今朝文官が持ってきたこの国の商会登録の為の書類を書いていた。

ふと視線を感じ後ろを見ると、リナが目を覚まし立っていた。

「ヨシヒコなのですね…」

リナは瞳に涙を溜めている。

「ああそうだ…リナ」

リナは大粒の涙を流しながら義雄に抱きつく。

義雄は優しく抱き寄せ、リナが泣き止むまでそのまま居た。

リナが落ち着くと、リナと魔王の城で分かれてからの事から転生してここに来るまでの事を話した。

リナはしばらく考え込み話し出す。

「ヨシヒコは、どうしたいのですか？」

俺は近くに人が居ないか魔法で確認し今まで誰にも言った事が無い
“夢”をリナに話した。

前世で召喚される前の夢は官僚から政治家なり日本を変える事だった。
召喚され失ってしまったが…転生して前世の記憶を思い出し新たな夢が出来た。

もう今は、その夢が目標になったかも知れない。

アース商会・本店。

雇った店員達に地下室を立ち入り禁止にして、商品説明をして開店した。

親父の知り合いの交易商人達が来てくれ、この世界に無い物は、利用価値が分からないのもあるが値段設定をかなり高めにした為、あまり売れなかった。

その中でも予想より売れたのがろうそく、石鹼、胡椒、砂糖、等だ。

この世界の石鹼は石のように硬く汚れも落ち難い上に肌が荒れる。

リーザさんの提案で、お客さんに試しに手を洗ってもらったら、好評で1個銀貨5枚なのに飛ぶように売れた。

胡椒や砂糖は、この世界にもあるので普通に売れた、砂糖は苦味が無く質が良いと評判になっている。

ろうそくは店頭で灯すと売れた、この世界では油を皿に入れ明かりにしているが油が高く。魔法では明かりが長続きしないし魔力が持たない。

この分なら俺の野望も夢じゃないぞ！

職人達は、見本の瓶やワイングラス、窓ガラスなどを見せ。リーザさんが溶解炉の使い方と作り方を説明している。

ワインの瓶が安く作れるようになったら親父が葡萄酒を入れて販売したいと言っていた。

開店してしばらくたったころ、何やら外でドラゴンが飛んでくると騒いでいたので外に出てみんなが見ている方を見ると、ドラゴンが町の近くを通り過ぎる所だった。

初めて見たぜ！ドラゴンなんて普通、観れないからな。

勇者はドラゴンに乗って魔王の城に行っただんな…俺はあんなのには、恐くて乗れないな。

あれ？何か今俺、嫌な予感がしたのは気のせい？

偽銀（前書き）

文字、誤字脱字など修正

偽銀

神聖デント王国

ルナ王妃は、機嫌が良かった。

ナバーラ王国侵攻とは、別の国に侵攻していた。神聖デント王国の主力、神虎大陸最強の白虎騎士団が力を発揮し敵国の王都を陥落させたのだ。

聖騎士がヘルルドからの書状を届けに来た。聖騎士から書状を近衛兵が受け取り、近衛兵が書状を王妃に渡す。

「……………」

書状を読んだ王妃は無言で、隣に座る国王に書状を渡す。

国王は書状を読むと顔が見るうちに赤くなり怒鳴る。

「何だと！ヘルルドが負けた、馬鹿な… ドラゴン、しかもリナだと…」

その場の空気が凍りつく。

「ナバーラ侵攻は中止しましょう」
ルナ王妃が言う。

「何故だ、ルナ。もう少しでナバーラを落とせる所だったのだぞ」
国王には珍しく、王妃に噛み付く。

ルナ王妃は冷たい視線を国王に向ける。

「だから貴方には、任せられないのです。リナがルイスに味方したのですよ？あんな貧乏国を手に入れるのに大事な騎士団を出すわけには行きません。それに勇者の従者だった、リナを敵にすると士気に影響しますわ」

「では、ナバーラを放って置くのか」

「しばらくの間です。この大陸を統一するのですから、他にいくらかでも攻める所は有るでしょう」

（やっぱり帝国の事もあるし、勇者を召喚させないとダメかしら…）

日本、警視庁。外事課。

森田警視正は、頭を抱えていた。
事の始まりは、米国中央情報局のリーザ・スミスを新田家に案内した事だ。

ごくごく一般的な家庭である、

新田家の子供になんで米国が興味を示し大統領が直接契約書にサインしたのか、彼には理解できなかった。

その後気になり、新田家を調査させたがやっぱり普通の家庭だった。

新田義雄は今回渡米した以外は海外に行った記録が無い。

彼は6ヶ国語が話せるが、あの二人が話した言葉は、聞いた事がない言語だ。

だが、それだけでは彼は頭を抱えない。

新田家からリーザ・スミスに連れられていき。その後、息子居所も連絡先も留学先も分からないと、毎日のようにクレームを受け。

更に義雄の父が別荘やマンションなどを建築しているお得意さんが、

代議士で政治的な圧力まで来たのだ。

米国に問い合わせても、機密の一点張りで埒が明かない。

「一緒に付いて行つた、だけなのになあ……」

彼の苦悩は、しばらく続く事になる。

ナバーラ王国

義雄はレオン領をナバーラ王からもらい、義雄・新田・レオンとなり爵位は男爵だ。

この大陸では、領地の名前＝爵位名で爵位を複数持つ大貴族も存在する。

レオンの領主は血縁に関係なく、代々レオンと名乗る。家名は別だ。国王などの直轄地は、騎士や下級貴族が管理を任されたりする。

レオン領は、ナバーラ王都と神聖デント王国の国境のちょうど中間の旧街道沿いの盆地だ。

旧街道は神聖デント王国からナバーラ王都にまっすぐ最短距離を通っているが、山を通る為、道が狭くモンスターが多い。

現在の街道は直轄地（王領）で山を迂回して通っている。

今義雄は国王から与えられた、王城近くの店舗に来ていた。

「無駄に広いな。まあ、タダでくれたから文句は言えないか」

元は逃げた大臣の屋敷で、店舗と兼用できる作りだ。逃げた大臣も商会をしていたそうだ。

家具や美術品などそのままで、執事やメイドが大臣に置き去りにされ、そのまま雇う事になった。

「このあたりが良いか…」

石の床に魔法で転送魔法陣を刻む。

「旦那様、美術品をお持ちしました。」

「ああ、ありがとう、ホセ」

ホセは執事だ、彼は優秀で逃げた大臣も商会を経営していたのだが商会の運営を任されていたそうだ。

ホセは愛国心が強く、逃げずに防衛戦に参加していた。

ちなみにホセは農家出身で家名がなく、歳は40歳中肉中背で黒髪。身長は俺と同じくらいで175cm前後だ。

「ホセ、明日中には戻る。後の事は頼んだ」

屋敷の資金に手持ちの金貨をホセに渡す、薬草を買った残りの金と食糧の売上金だ。

「かしこまりました」

リナとバーク少佐、ブラウン中尉を連れ、美術品とボーダーでは取れない薬草と一緒にアース商会本店に転送魔法陣を使いボーダーに戻る。

アース商会、本店

店に戻った俺は、ミゲルとスミスさんの報告を受け、店員達に紹介

される。

ミゲルとスミスさんにリナを紹介してナバーラでも事を説明すると二人ともかなり驚いていた。

ミゲルは「え… ホントに勇者様なんですか!」ぶるぶる震えながら、何度もきいてきた。今度、リナに竜化してもらって見せれば信じるだろう。サービスで空でも飛ばしてやろうか。

俺はリナと二人で美術品を売りに行く。

残りの美術品をボーダーの町で売ると金貨100枚になった。その足でギルドに行き報酬金貨200枚を受け取る。商人ランクがEからCに上がった、商人ランクは純粋に受け取った報酬の総額で決まる。

帰りにゴードン商会にやって来た。

「これは、これはヨシオ様、今日はどんな御用でしょうか?」

やけに態度が良い、こないだの水晶で儲けたのだろう。

「実は偽銀を売って欲しい」

「え、偽銀ですか… あんなもので良ければいくらでもお譲りします」

しばらくすると袋が5個何人かで持ってきた。

「いくらですか?」

「はあこんなもの売った事がないものですから…… ヨシオ様なら言い値で良いですよ」

義雄は中を確認すると砂の粒のような偽銀だ。持ち上げてみる1袋10kgあるだろうか…

「1袋金貨1枚でどうですか?」

「ええー! そんなに高く買っただけなのですか」

義雄は金貨を5枚払い。流石に重いので軽減魔法をかけ、袋をリュックに入れる。

「僕の故郷で人気がありまして…この金額で毎回買いますので、誰にも言わないで頂きたい。勿論うちの店の者にも…」

「……分かりました、その代わりと言っては何ですが水晶がまた仕入れられたら売って頂けませんか」

「分かりました、度仕入れられたらゴートンさんにお譲りします」

ゴードンさんには、偽銀を仕入れてしまったら取って置いて欲しいと頼んでおいた。

ゴートンさんはニコニコしながら見送ってくれた。

「ヨシヒコ、そんな物どうするのですか」

リナが不思議そうに聞いてくる。

この世界では銀を採掘して商会に持ち込む冒険者や鍛冶屋など居るがその中に偽銀が混じっている事がある。混ぜたのかもしれないが…偽銀は、融点が高くこの世界の技術では装飾品に加工が出来ない、仮に加工出来ても銀と価値が変わらないだろう。なので、かなり安い。捨てている人も居るぐらいだ。

「偽銀は俺の故郷ではプラチナと呼ばれていてね、金と同じぐらい価値がある」

リナは驚きながらも「そうなんですか」と言っただけで、お金に興味が無いのかそれ以上聞いて来ない。

リナはお金よりも義雄があげた飴の方が気に入ったみたいだ。

「リナ、偽銀の事は秘密にしておいてくれ」

「はい」

リナが飴を口に含んだまま、笑顔で答える。（……かわいい）

店に戻った義雄は、みんなを集めナバラ支店の事を相談する。

「うーん、俺は開店したばかりの店があるから動けないな」
最初にミゲルが言う。

「僕もミゲルはここに居て欲しい。この店は順調だしこのままミゲルに任せようと思うけど良いか」

「勿論だよ、任せてくれ！必ず成功させる」

ミゲルが瞳を輝かせて自身満々で答える。

「ヨシオ、相談なんだけど表通りの買わなかった店舗を買い取ってハンバーグを売りたいんだ。勿論それだけじゃなく、地球で食べた食べ物を売りたい」

「面白そうだな、任せるよ。スミスさんは何かありますか」

わたしたち

「米国としては、ナバーラから持ち帰った薬草もあるので今の所は良いですが今後も物資の提供を続けるには、何か他の物も考えていたきたいです」

今度はスミスさんが話す。

バティンク

「この辺に居ないモンスターや植物、薬草などを送れば良いだろうか？」

「ええ、それでしたら本国も納得すると思います」

「分かりました、しばらくはそれで対応しましょう。それとこれから僕は支店を増やす予定ですが米国は全支店に人員を置きますか？」

「いえ、流石にそこまでの人は割けませんので。新田君に護衛を出す程度に止めます」

米国は異世界の事は機密にしているので、人員に限りがある。

偽銀（後書き）

融点（固体が融解し液体化する温度のことをいう）
別の物です。←

「白金」「プラチナ」（platinum）

「ホワイトゴールド」（white gold）

レオンの町

ナバーラとの物資のやり取りを相談してボーダーの店員を1人ナバーラに派遣する事になった。

ミゲルとスミスさんとの話を終えた俺はミゲルと職人達にステンドグラスを作るのを最初の目標に頼み、俺が書いた本に作り方が書いてあるので見るようにと指示を出す。

ナバーラに行く準備をしようと思った時、ミゲルが話しかけてきた。

「ヨシオ、言い忘れていた事があるんだ」

「ん？何」

「転送魔法陣の事なんだけど、ギルドに登録した方が良いと思うんだ」

転送魔法陣はこの世界でもかなり貴重で、使っているのは、ギルド、1部の国、ごく1部の商会ぐらいで、それぞれオリジナルの魔法陣を使っている。

みんな同じものを使うといういろいろ不味い。A国が王族の逃走用に陣を作るとそこにギルドや他の国人間が出入りできる事になる。

商会なら間違ってA国に商品を送って知らない顔されるかもしれない、暗殺者や盗賊が侵入される事もある。

ギルドに登録すると仮に後から偶然同じ魔法陣が開発されても所有権が認められる。

何処からか情報が漏れたりしてギルドに登録されると、魔法陣が使えなくなる。

偶然魔法陣がかぶっても登録すれば、所有権を主張し魔法陣を破壊

して使わないように言える。

従わなければ賞金首なる。勿論ギルドも追放、仕事が出来なくなる。所有権の売買も可能だ。

逆に転送防止の魔法陣や魔法も存在する。

登録するには、魔術師ランクC以上必要だ。ミゲルから説明を受ける。

「ミゲルだと登録できないのか… 試験は誰でも受けれるのかい？」

「魔術師の推薦があれば出来るよ。推薦だけなら俺でも出来る、次の試験は3ヵ月後、学園都市であるよ」

ミゲルが申し訳なさそうに答える。

「そうか… 受けてみるよ。推薦頼むよ、ミゲル」

「うん、推薦状書いておくよ」

スミスさんたち

「それと… 米国の行動を見ていて欲しいんだ」

「え？ どうゆう事」

「地球では米国は最大最強の国なんだけど、地球のあちこちで自国の利益の為にだけに国を滅ぼしたり、裏から支配しようとしてたりしてるんだ。人間の権利を大事にしてるくせに、ミゲルの実験みたいな事もするから心配なんだ。もし人が足りないなら雇ってもいい、スミスさんも祖国には逆らえないだろ？ 祖国には家族も居るし」

ミゲルは柄にも無く真剣な表情になり。

「考えたくないけど… ヨシオがそれで安心するなら調べてみるよ。リーザさんがそんな事、しないとと思うから何も無いよ」

（ミゲルはもしスミスさんが裏切ったら、どうするだろう… 俺からも調べておくか…）

ナバーラ王国、

ナバーラに物資を転送させて俺とリナ、バーク少佐とブラウン中尉でナバーラに来た。

「お帰りなさいませ、旦那様お城から使者が来てお帰りになりしい登城されるように、との事です」

「ただいま、ホセ。早速、城に行ってくる、馬車の用意をしておいてくれ」

「かいこまりました」

ホセは頭を下げて返事をする。

城まで徒歩5分、まだ籠城の影響が住民の姿が見えない。まあ城の近くだからかも知れないが。

城に入り、謁見の間に通される。他の部屋は、籠城戦で兵士たちが寝泊りしてたのでまだ片付いていなくて使えない。

「お待ちせしました、閣下。私がレオン領にご案内させていただきます。サントスとお

呼び下さい」

サントスは20代前半ぐらいで身長は185cmぐらい、赤髪、蒼い瞳。騎士らしく筋肉質でイケメンだ、持てるだろうな…。

「よろしく頼むよ、サントス」

サントスの案内でレオン領に行く事に、サントスはレオン領の村出身で、ルイスに憧れて騎士になり、神聖デント王国との戦争で活躍して小隊長に昇進した。

サントスの小隊が護衛でレオン領に行く、俺が領主として落ち着くまで駐留してくれるそうだ。大臣から領地の引渡し証を受け取り、いったんサントスと共にナバーラ支店に戻る。

ボーダーから持ってきた物資を馬車に積み込む。転送魔法陣だけではミゲルの魔力の制限があるので出来るだけ持っていく。

「ホセ、すまないなかなか時間が取れない。君に任せるからこれを資金に店を出してくれ、ボーダーから1人こっちに来る。その店員とミゲルに商品の事は相談してくれ」
金貨100枚の入った、袋を渡す。

「かしこまりました」

「後は頼んだ、行ってくる」

ナバーラの王都を出た俺達は、王直轄の街道を通り。旧街道に出た。王直轄の街道は、戦争直後にもかかわらず、治安が良く何事も無く通れた。

旧街道に入って突然、ゴブリンやオークに襲われるようになり。道も狭く荒れている。バーク少佐に「あれがオークだよ」と教えると

オーク亭のことを思い出して顔が青ざめていた、ブラウン中尉はけろりとしている。

神聖デント王国軍の残党が盗賊になり、襲ってきたりしたが、サントスが全て危なげなく倒していく。俺の出番は無かった。

俺は道中、馬車の中でレオン領の地図や資料を見ていた。

（うーん、領地は広いのに農地が狭いそれにしても山が多いな、レオンの町の近くに大きな川がある水には困らないか…、まずは現状確認だな）

レオン領に行く途中、周辺の村にも立ち寄ったが、ほとんどの村が焼かれ、小屋を作って村人達が住んでいる。ルイス騎士団の活躍でほとんどの住民は避難して無事だったがその分食糧、家、全てが足りないのが現状のようだ。

リナは立ち寄った村の子供に飴を一粒ずつ、あげていたがなくなっ
てしまい、子供達に何度も謝り。その時のリナの表情と子供達の笑
顔が目に残きついた…。サントスやバークさんも複雑な表情だ。

ナバーラ王都から1週間の旅路でレオンの町に着いた。

いや、町だったと言うべきか…、町の建物はほとんどが崩れ落ちる
か焼け落ち、瓦礫はそのままだ。町の人々の表情は暗い、自分の家
だった場所に小屋を建て野宿同様な生活をしている。

前レオン男爵は神聖デント王国との戦争で亡くなり、家族も臣下達
も皆殺しにされ。食料は山菜やモンスターの肉で今までしのいでき
たそうだが、現状では餓死しないでしのげる程度でかなり苦しい。

俺達は焼け残った古宿を借り切って仮の役所にし、転送魔法陣のス

テンレス版を置き、情報収集と現状把握に取り組んだ。町の代表を呼び、話を聞き、町で食糧を配った。

翌日には、転送魔法でボーダーに戻り、鍛冶屋で農具を発注して、食糧を買ってレオンに戻る。食糧の配布をサントスに任せ、町を見て回り、それが終わると、町の周辺を見て回る。

「サントス、明日は領内と村を見て見たいのだけど、町の食糧は大丈夫？」

「はい、当分は平気です。町民は喜んでいますよ」
レオン領には、3村、1町ある。

「…ヨシヒコ、私に何か出来る事は無いですか？」

リナは自分から何か積極的に行動するタイプじゃ無い、どちらかと言うと控えめで、やさしい子だ、嫌なことでもため込んでしまうところがある。

前世の頃は妹の様な存在で本当は彼女に魔獣と戦わせたくなかった。その影響か彼女に何かやってもらうのに引け目を感じていて、今まで何も頼んでいない。

「リナ… 俺は」

「ヨシヒコ、私はヨシヒコや子供達の役に立ちたいのです。16年間も休んでいたの、働かせて下さい」

村の子供達とのやり取りで、リナはリナなりに何か思うところがあったのだろうか。

「ああ、わかったよ。でも無理はしないでくれ、俺はリナに幸せになつて欲しいんだ。リナは何時も自分の事は二の次だから……」。

リナも少しは大人になったんだな」

何故カリナが不機嫌になり「私は子供じゃありません！」と言って
ふくれている。

前世の家族

食糧を馬車に乗せ、村見て回った。焼け落ちた村々、荒らされた畑、食糧を渡しても一時しのぎにしかないかもしれない…。

義雄は仕方なく領地をもらったが資金的な基盤が出来ていれば喜んで引き受けただろう。

領内の住民達のしばらくの間の食糧が確保され。

バーク少佐達に「リナに何人も乗れないから」と言い留守番させ。義雄はリナに乗り、領内を地図と見比べながら空からデジカメで写真を撮り回る。たまに地上に降りて探索しながら魔法で印と魔法陣を地面に刻んでいく。

そんな日が数日続いた、ある日。

昼前に仮役所に戻ってくると、人が大勢来ていた。

「あつ、閣下。ちょうど良いところに、この若者達は、町の青年なのですが、仕事が欲しいそうで…、町がこんな状況で仕事も家も無く、困っているそうです」

「俺は自警団の代表をやってるギムてもんだ。あんたが新しい男爵様か？」

おそらくこの集団の代表らしい、がっちりとした黒髪の中年ぐらいの男が話しかけてきた。

「ギム、男爵閣下に無礼だぞ。しっかりと敬語で話せ」

サントスが怒鳴る。

「サントスいいよ。ギム、話やすい言葉でいい。僕が新しい男爵だ、話を聞こう」

「すまねえ旦那、俺はこんな話し方しかできねえからよ。それでよ、食い物を恵んでもらってばかりじゃ申しわけねえからよ。何か俺に出来る事がねえかって聞きに來たって訳よ」

「そうか…、丁度いい。ギム、何人集められる？」

「そうだなあ、明日の朝までに300人てっところか」

「わかった、金は払う。明日の朝までに出来るだけ集めてくれ、男女、種族は問わない。働けるものなら誰でも良い」

「…で、何をするんだ？それで集めるやつを考えるから教えてくれ」

義雄はデジカメの写真を元にPCで作った、新しい地図を広げサントスとギムに見せる。

「これは…、かなり正確な地図ですね」

サントスが感心しながら言う。

「まず、最初にここから、ここまで領地を囲むように石垣を作る」
サントスとギムは啞然としている。

ヨシオが言った壁の範囲は、ほぼレオン領の平地を囲むように石垣^{かへ}を作ると言う事だ。

「ホントにやるんですかい旦那…」

サントスはまだ固まっている。

「ああ、これはモンスター除けの意味だ。勿論、戦争の時にも有効だ。だが1番大きいのは農民が安心して農地として平地を利用してもらう為だ」

「閣下、これを作るには莫大^{かね}な予算が必要です。我々の予算では足りません」

「ああ、サントスそれは俺が出す、安心しろ。それより人出が欲しい、何とかできないか？」

「わかったぜ、出来るだけ集めよう。だがこれ以上は農民も使わないと無理だぞ」
ギムが答える。

「しばらくは農業ができないが仕方ない。農地を焼かれた物を中心に集めてくれ。それでも足りなければ、周辺の村から集めよう。それと…、サントス」

義雄は金貨が100枚入った袋をサントスに渡す。

「とりあえずこれを使って、足りなくなったら僕に言ってくれ。

……しばらく部屋で休む、領内を回って疲れたのでね。あと、今日は部屋に誰も通さないで、ゆっくり寝たいんだ」

「分かりました、閣下」

「ギム明日の朝、仮役所の前で待ってるよ。とりあえず明日は瓦礫の撤去だ」

義雄はリナと共に部屋に入る。

ギムは苦笑いしながら「お楽しみか」と言い、人を集めに外に行く。サントスは黙ってその様子を見ていた。

部屋に入った義雄はリナに話しかける。

「リナ、すまないが留守を頼む」

リナは明らかに不満な表情になり。

「私も、ヨシヒコの故郷に行ってみたいです」

「落ち着いたら連れて行くよ、何かお土産買ってくるから今日は待っていてくれ」

「分かりました…、約束ですよ」

リナは渋々返事をする。

義雄はリュックを背負うと笑顔で「ああ、約束するよ」と言つと、ステンレス板の魔法陣とは別の魔法陣を魔法で空中に作り、その中に消えた。

義雄が使うオリジナルの魔法は、この世界で使われている魔術ものと魔法陣の使い方が違う。

魔法陣は何か物に書き発動させるのがこの世界の普通のやり方だ。そもそも魔法陣の役割は、自分の魔力を流し不足分を自然界の魔力

を吸収して発動させるのだが、魔法で魔法陣を作る発想がない。

ナバーラ籠城戦で使ったビームの魔法は、大量の魔力を使う魔術で、義雄は魔法陣を魔法で空中に何層も作り、最後の魔法陣以外は自然界の魔力を吸収して次の魔法陣に送ってを繰り返し、最後の魔法陣で発動させてビームを放つ。

自然界の魔力を使うので魔力はほとんど消費しない、誰でも使えるわけではなく空中に魔法陣を書く正確なイメージと義雄が開発した魔法陣が必要である。

この世界では肉眼で見えない気体の認識が無い為、恐らく使えない魔法なのだ。教えれば可能性はあるが…。義雄が開発した、空中用の魔法陣が新しく開発した魔法陣が必要だ。

逆に地球の人間が魔術を覚えて同じ事をしようとしても、魔法で魔法陣を作るには熟練した魔力のコントロールが必要で簡単に出来ない。

それに魔法陣の義雄レベルの知識と義雄がPCで開発した空中用の魔法陣が必要なのだ。訓練と能力しだいで使えるようになるかも知れないが…、魔法を使う事すら難しいのだから無理に近い、勇者のような存在でなければ…。

PCのデータのほとんどは魔法陣の組み合わせで、その魔法陣の画き方が分かなければ魔法陣は完成しない。

日本、村上家。

「一はその日は祭日で休みだった。」

普段なら部活の練習があるのだが、今日は練習に使っている体育館が他の部活の試合で1日使えないので休みになった。

「一は飲み物を取りに台所に行くと祭日で仕事が休みの父がいた。」

「一今日は部活じゃないのか？」

「今日は体育館が使えないから休みだよ」

「一の父は「そうか、たまにはゆっくり休め」と言い親子の短い会話は終わった。」

そう言うつと冷蔵庫からペットボトルを取り出し台所から廊下に出る。廊下を歩いていると後ろから、誰かが話しかけてきた。

「一昼間に家にいるなんて珍しいな、今日は休みかい？」

「うん、おじいちゃん休みだよ」

「一は、後ろに振り向きおじいさんに返事をする。」

「一の家は、父が長男で父方のおじいちゃんと一緒に住んでいる。」

「一、義雄君とはまだ連絡が着かないのか？」

「…うん、優がアメリカに問い合わせたみたいだけどダメみたいだ。片言だしね。」

それにおばさんが義雄を連れていったスミスって人と一緒に来た、なんとかって警察の人に問い合わせてるみたいだよ」

おじいちゃんは何時[・]も義雄の事を聞いてくる。

一度や二度なら幼馴染なのでわかるが、子供のころから何度も聞いてくるのだ。

一^{はじめ}が聞いてもはぐらかされるだけで、どんな理由か教えてくれない。

一^{はじめ}はおじいちゃんと別れると部屋に向かう。

「そういえば、あの頃からだな」

一^{はじめ}は独り言をつぶやくと部屋のドアを開け部屋に入る。

村上家、リビング。

一^{はじめ}と別れたおじいさんは、リビングに戻り、ソファに座る。

「お父さん、まだ一^{はじめ}に義雄君の事を聞いたのか」

「ああ、すまんどうしても気になつてな…」

「気持はわかるが、一^{はじめ}にとってはただの幼馴染なんだ。一^{あいつ}も何度も聞かれるから不思議に思ってるんだ」

「だが和彦…、義彦^{あすし}はお前と同じ大事な、息子なんだ」

「わかってるよ父さん。俺にとっても大事な弟[・]だ。最初に打ち明けられた時は、この子何言つてんだ？と思っただけだな」

一^{はじめ}の父は苦笑いをする。

「あの子は間違いない、義彦だ。死んだかあさんも言っていただろう」

「わかってるよ、父さん。今は疑っていいない」

一の父が答えると突然、リビングの床が円形に光り出す。

「なんだ？……まさか義彦が言ってた、魔法陣なのか？」

魔法陣から見覚えがある少年が姿を現す。

漆黒の仮面（前書き）

入力ミス、誤字脱字などを訂正しました

漆黒の仮面

「突然すいません、一郎父さん、和彦兄さん、俺の魔法の事を知っていて信用できる人間は地球こくでは一郎父さんと和彦兄さんしか居なくて…。ここに來るしか選択肢がなかったんだ」

義雄が使った、世界間の移動魔法陣は目標になる者が必要で、その人の近くに移動する魔法なのだ。戻る時は今のところ、リナを目標にしようと考えている。

ステンレス板のような魔法陣を作れたら良いのだが膨大な魔力が必要で空中用の魔法陣でないと魔力が足りない。

あの女のように秘術や並はずれた人外の魔力があれば別なのだが…。今は勇者でも何でも無い義雄には不可能だ。

「どんな理由でも帰るところがここしか無かったと言われるのは嬉しいよ、義彦」

一のお祖父さんであり、義雄の前世の父の一郎父はつちさんが言う。

「ありがとっ、一郎父さん…」

「義彦…、いや義雄君話を聞きたいんだが」

義雄の前世の兄で一の和彦わちが言う。

「…詳しいことは、今は言えません。だけど…、義彦として話すなら、『まだ』です。」

義雄としては此処に居ない事にしてくれると嬉しいです」

和彦は真剣に義雄の話を聞き、少し間を開け話す。

「そうか…、分かった。前にも言ったが義彦の人生は終わっているんだ。義雄君が真実を知りたいのもわかる。だけど…、義雄を大事にしてほしい」

「和彦」と一郎が言々と和彦をにらむ。

「本当にありがとう。でも、僕は義彦の自分も、義雄の自分も区別は出来ない。前にも言ったけど、真実を求めて、自分の答えを見つめます。和彦」

「真実が何であれ、義雄を大事にしてほしい。たとえ異世界がどうなっても」

「義彦も義雄も僕には区別が無いように、異世界も地球も区別は有りません。ただ守りたい人達を守り、やりたい事したいだけですよ」

「その話は真実が分かってから話し合う約束だ。『まだ』なら今話し合う事じゃない、今は話しても結論が出ないだろう」
一郎が言々と和彦と義雄がうなづく。

「実は相談があるんだ、本当は僕が成人になるまで待ってほしいと思うっていたのだけど。予定が狂って…、とにかくこれ売りたい」
プラチナが入った袋をリュックから取り出すとリビングのテーブルに乗せる。

ナバーラ王国と神聖デント王国国境付近の山。

十数人の騎士たちはナバーラ王城から母国である神聖デント王国に向かって人目を避けるように行軍していた。

その中に彼らの指揮官であるヘラルド將軍の姿もあった、義雄との対面後。

ヘラルド將軍は何度も敵の追手に襲われ、金目当ての傭兵や農民達にも襲われる始末である。

「閣下、明日には国境を越えられます。やっとここまでこれました娘の顔が見れる」

彼はこの騎士団の副団長で今回の遠征中に娘が生まれたのだ。

「まだ喜ぶのは早い、母国の地を踏むまではな」

（無事に帰れたとしても敗戦の責任を問われ俺の首が飛ぶかもしれないがな、だが）

ヘラルド將軍には敗戦の責任を問われなという予想もしていた、この戦いは負けてはならない『聖戦』なのである。

敗戦の責任を指揮官に取らせれば敗戦を認めた事になり、そんなことはできないとヘラルドは思っていた。

「閣下、まだ早いですがこのあたりで野営して、まだ暗いうちに国境を越えましょう」

「ああ、そうだな。分かっているとは思いが火は使うなよ、敵にばれるからな」

「了解です」

野営の準備と言っても逃げる途中に襲った村から奪った食料をみんなで分けるだけだ。テントや寝具などは勿論ない。

騎士達はその場に座り込み、干し肉と古くて硬い保存用のパンを受け取り黙って食べている。

その時、仮面の男が突然現れた。まだ、騎士たちは仮面の男に気づいていない。

その男は黒いローブを着ていて、右腕に日本刀を持ち、漆黒の仮面を付けている。

仮面の男は日本刀で背後から一人の騎士の首を切る、すると周りの騎士が仮面の男に気づき声を上げるが騎士たちが剣を抜く前に一瞬で仮面の男に切り倒されていく。

「貴様ああ！」

食料を騎士たちに配っていた、副団長が剣を抜き仮面の男に切りかかる。

「
」

副団長の剣は仮面の男の体をかすめ空を切る、仮面の男が無言で刀を一閃すると副団長の首は体から離れていた。

ほとんどの騎士は、仮面の男の動きを止めることが出来ず。次々と切り倒されていく。

気がつくとヘラルドと仮面の男だけになっていた。

「貴様、何者だ！その刀、勇者が使っていたものと同じだが まさか
」

「
」

仮面の男は無言でヘラルド將軍に切りかかる。ヘラルドは剣で受け

流し、剣と刀の打ち合いになる。

ヘラルドは勇者を裏切ったとはいえ最初から最後まで勇者に同行し数々の戦いを生き残ったほどの剣の使い手であり一流の剣士なのだ。しばらく続いた剣と刀の打ち合いはだんだんヘラルドが剣速について行けず徐々に押され始める。

（この太刀筋、間違いない勇者と同じだ。だが奴は死んだはずだ）

「貴様、勇者なのか？ いや、そんなわけではない、何者だ！」

ヘラルドは剣を構え、間合いを計りながら仮面の男に話しかける。

「

仮面の男は無言で刀を振りかざし、ヘラルドの間合いに入り切りかかる。

徐々にヘラルドは押され崖の端まで押され、後がない。

「 ちい

ヘラルドはこのままでは切り殺される、と思い自分から崖に飛び込む、仮面の男が崖の下を覗くと崖下の川に水しぶきが上がっていた。

「

仮面の男は無言でその場を後にした。

神聖デント王国、

城の一角に彼の研究施設がある。彼の見かけは10代後半で、身長が170代中盤ぐらい。髪は見の歳にふさわしくない白髪で長髪、目は紅い瞳をしている。

だが、彼の見かけに騙されてはいけない。彼は人間では有るが自信の体を魔術で普通の人間の3倍は寿命がのびていて、彼の実年齢は100歳を超えているのだ。

彼の名はルーク、この国の魔法省の大臣だ。ルークは魔王と戦ったパーティのメンバーで大陸中では、1、2を争う魔術師なのだが、政治には興味が無く大臣と言っても形だけで政務は文官たちがしている。

「フツ、逃げられたか。流石ヘラルドだね、まあ良しさ。まだあの人形は未完成だから仕方ない、おかげでいい実験になったよ」

ルークが独り言をつぶやいていると部屋のドアがノックされる。

「今は実験中だと言っただろ、ん？王妃か、仕方無いなあゝ入って良いよ」

するとドアを開け、ルナ王妃が入ってくる。

「…聞いたわよ、人形あれを使っただって？人形あれを使う時は私に相談する約束でしょ」

「良いじゃないか減るものじゃないしさ、あれは面白い。後は魂を入れて固定させるだけで完成さ、それが一番難しいのだけどね」

「あれは貴方のおもちやじや無いのよ、約束は守ってもらうわ。好きなだけ研究費用と施設と人間まじやうを約束通り出しているでしょ」

「分かっているさ、女のヒステリーはみつともないよ。この研究は面白いが私の研究したい物じゃないんだよ？まあ、面白いし約束だから仕方ないけど。それでそろそろ魂の準備を頼むよ」

「もう準備は始めているわよ、これがうまくいけばこの大陸、いえこの世界は私のものよ。まったく勇者のせいでだいぶ予定が変わったけど」

「フフツ、国民が君の今の発言を聞いたら卒倒するよ。ところで今度の魂は誰を使うのだい？聞くだけ野暮か」

ルークは苦笑いをする。

「人形あのからだをここまで金と時間をかけたのは私のもっとも愛しい方の魂

を入れる為よ、その為にここまで苦労したのだから」

「そうだろうね、君の思い人だよね…。」

ああ、そうだ。ヘラルドが崖から川に飛び込んで逃げたんだ、あの川は神聖デント王国に流れている。生きていたら実験材料モルモットにしたいんだが探してくれないかい？」

「…分かったわ、ヘラルドの今所がもし分かったら教えて頂戴。表立って探せないから…実験に使うのなら回収は、私の直属の部隊にやらせるわ」

「勿論だよ、使い魔に探させているから、分かったら教える。先に私が捕まえてしまつかもしれないけどね」

「分かってるわ…、私はそろそろ戻るわよ。政務があるからね」

「政務ねえ、君が何故世界の覇権程度のものを欲しがるのか、分らないよ。それに国王はまだ何も知らないのだろう？それとも君の思いい人の望みかい」

ルナ王妃は一瞬、不機嫌な表情になるが元の表情に戻しルークに言う。

「貴方には関係ないことでしょ私は貴方に研究する場を提供して、貴方は約束の物を作ってくれれば言いのよ」

「そうだったね、私は好きな研究さえ出来れば良い。たとえ世界を誰が支配しようと、この世界が滅亡しようとな、勇者みじひこが居た世界も面白そうだからね」

「…好きにすれば良いわ、でも約束が終わってからよ。その気になれば貴方なんて何時でも殺せるのよ、じゃ～よろしくね、ルーク」

そう言うところルナ王妃は部屋から出て行く。

「外見はともかく巫女の面影は無いな、そりゃそうかフッフ。ああ、そうだ。人形を回収しなくちゃ」

ルークは水晶に向かって詠唱を始める。

日本、

結局、その日のうちにプラチナは、一郎の友人が役員をしている貴金属を扱っている大手商社に売却した。

売った先の人は、すでに会社を引退している一郎から突然電話があり、大量のプラチナを売りたいと言われ。

しかもその日のうちに現物を持ってきて換金していった事に驚いていた。

プラチナを売り終わった頃に夕方になっていて、その日はリナのお土産と水晶などを買い向こうの世界に戻ることにした。

今は一郎の愛車で家に戻るところだ。

「義彦、もし向こうのものをこちらで売り買いをするなら、会社を立ち上げてそこで売り買いするほうがいい会社も日本ではなく海外に作るのが理想的だな」

「それは、そうなのだけど…、まだ、未成年だし向こうの世界に居る時間が多くてこつちに会社を作っても管理できない」

「それくらい父さんにまかせろ、それでも大学を出てから60まで商社マンとして勤め上げた経験がある。それに父さんは義雄に今まで何も出来なかった、あんなことがあったからな…」

（母さんが亡くなって心配してたけど少しは元気になってくれたみたいだな）

一郎は根っからの仕事人間で母が生きている頃はボランティアなどの活動をしていた。

「…考えておくよ、一郎父さん。プラチナを売ったお金は預けておくのから悪いけど税金とか頼むよ」

「父さんに任せておけ、会社のことも調べておいてやるからな」

「このまま戻ると一と会うかも^{あは}しれないから、どこか人目の無いところで降ろしてほしい」

「そうだったな…わかった人目につかない所だな…」

義雄は郊外の林の中に下ろしてもらい、空中に魔法陣をつくり向こうの世界に戻っていった。

「さて、これから忙しくなるぞ」

一郎はそう言つと愛車に乗り、
一^{はじめ}が居る家に向かつて元気よく車を
走らせる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966w/>

逆襲の元勇者（仮）

2011年10月28日15時22分発行